

大学教育開発研究シリーズ
NO.25 ● Mar. 2016

大学院指導の組織とシーケンス

—立教の点検と展望から—

立教大学
大学教育開発・支援センター

ISSN 1881-1035

大学院指導の組織とシーケンス

—立教の点検と展望から—

立 教 大 学

大学教育開発・支援センター

はじめに

この冊子は、2015年11月10日に開催されたシンポジウム「大学院指導の組織とシーケンス」の記録である。当日は、最初に「話題提供」として寺崎昌男氏（本学名誉教授）の「大学院制度の原型という視点から」のあと、加藤睦氏（研究推進担当副総長、文学部教授）と北本俊二氏（理学部長、理学研究科委員長）からそれぞれ、文学研究科と理学研究科における指導について事例報告がなされた。

寺崎氏の「話題提供」にもあるように、戦後、新制の課程制大学院制度に転換したのち、理工系や医学系など広義の理系は、新しい制度の趣旨に沿った運用がなされてきたが、人文・社会系は、旧制の大学院制度の慣習をひきずるかたちで運用される傾向が強く、1980年代以降、課程博士の授与数が増加してきたとはいえ、いまだに文系と理系の間に大きな懸隔がある。そのため、こんにちにおける大学院改革の課題は、いわば二重になっている。すなわち、課程制大学院制度に沿って運用されている理系を念頭においた、大学院教育の質的向上と学位の質保証という課題と、人文・社会系を念頭においた課程制大学院制度の実質化と、そこにおける指導の質的向上という課題である。理学研究科以外はすべて人文・社会系である立教大学にとっては、理学研究科での指導例をいわば理系モデルとして受けとめ、文系において課程制大学院の趣旨をどのように実質化できるかを一今回の場合には文学研究科の事例をとおして一考えるというアプローチとなる。

現段階では、文系においても課程制大学院の趣旨を踏まえた運用を進めていこうという方向性については合意があるように思われるが、指導においてそれをどのように実質化していけばよいのかについてはなお模索中である。その手がかりのひとつが、シンポジウムのサブタイトルに掲げられている「シーケンス」の確立であろう。学生がついてこられるかどうかはべつとして、まずは学位取得に向けてのスケジュールを大学院学生に示すことである。この点については中間報告会や予備審査会など、研究科によってさまざまな形で組織化の試みがなされている。つぎには、外部の学術雑誌に論文を投稿するように促すことである。研究を外に当てるという意味でも、また学会で通用するような学術論文の書き方を指導するうえでも、専門分野にかかわらず、論文の投稿は指導上の要点をなすよ

うに思われる。また、研究を外の風に当てるという点では、学会報告はもとより、他大学の大学院学生や研究者との交流が効果的であるという論点も浮かび上がった。東京に立地する大学は、この点では大変有利である。日本学術振興会の特別研究員制度の活用も、学生の研究を軌道に乗せるうえで有意義であるとの指摘も見られた。シンポジウムの記録には、これらの、そしてその他の論点が具体的に触れられているので、ご一読いただければ幸いである。

最後に登壇者の先生方と本シンポジウムを企画・運営された大学教育開発・支援センターの関係者にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

社会学部長、社会学研究科委員長

松本 康

はじめに	
プログラム	9
開会挨拶 原田 久 氏	11

第1部：話題提供

大学院制度の原型という視点から	17
寺崎 昌男 氏	
はじめに	17
1. 大学院制度の始まり	18
2. 占領下におけるアメリカからの導入—単位制度と課程重視—	19
3. 戦後残された課題—行政と学界—	21
4. 今問われていること	23
【レジュメ①】	28

第2部：事例報告

博士後期課程の「指導」とは—文学研究科の場合—	33
加藤 睦 氏	
はじめに	33
1. 原体験	34
2. 学位取得までの制度的シーケンス	34
3. 文学研究科における研究指導—履修要項より—	35
4. 博士論文中間報告書という関門	36
5. 一里塚としての学振特別研究員申請	37
6. 院生の成長のモデル	39
7. 他研究科の制度的シーケンス	41
8. 研究指導へのアンビバレントな思い	42
【スライド①】	44

博士（理学）への道	51
	北本 俊二 氏
はじめに	51
1. 博士論文とは一履修要項よりー	52
2. 博士論文だけでは不足ージョブを得るための業績が不可欠ー	53
3. 研究スタイル①理論	54
4. 研究スタイル②小規模実験	55
5. 研究スタイル③大規模プロジェクト	56
1) タイミング	
2) 論文執筆のシーケンス	
3) プロジェクトの成否に翻弄されるというリスク	
4) 地上加速器実験の場合	
6. 投稿論文執筆と共同研究がカギー課題としての組織化・体系化ー	59
7. まとめ	60
【スライド②】	62
 質疑応答・ディスカッション	73
【参考資料】大学院教育の「体系性」「組織化」に関する中央教育審議会の提言	82
 閉会挨拶 小澤 康裕 氏	92

大学院指導の組織とシーケンス

ー立教の点検と展望からー

2015年11月10日（火）開催
シンポジウムの記録

プログラム

大学院指導の組織とシーケンス

—立教の点検と展望から—

開会挨拶 原田 久 氏

(大学教育開発・支援センターセンター長、副総長、法学部教授)

第1部：話題提供

大学院制度の原型という視点から

寺崎 昌男 氏 (立教大学名誉教授、東京大学名誉教授)

第2部：事例報告

博士後期課程の「指導」とは

—文学研究科の場合—

加藤 睦 氏 (副総長 (研究推進担当)、文学部教授)

博士 (理学) への道

北本 俊二 氏 (理学部長、理学研究科委員長)

質疑応答・ディスカッション

閉会挨拶 小澤 康裕 氏

(大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部准教授)

司 会 松本 康 氏 (社会学部長、社会学研究科委員長)

日 時 2015年11月10日 (火) 18:30 ~ 20:30

場 所 池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

大学院指導の 組織とシーケンス

—立教の点検と展望から—

司会
社会学部長、社会学研究科委員長
松本 康 氏



○司会 大学教育開発・支援センター主催シンポジウム「大学院指導の組織とシーケンス—立教の点検と展望から—」を始めさせていただきます。私は本日司会を務めさせていただきます、社会学部、社会学研究科の松本と申します。よろしくお願いいたします。

では、最初に「開会挨拶」といたしまして、大学教育開発・支援センターセンター長、副総長、法学部教授の原田久先生からお願いいたします。

Ⅰ開会挨拶

○原田 皆様こんばんは。大学教育開発・支援センター長の原田でございます。本日は雨の中、当シンポジウムにご参加をくださりまして本当にありがとうございます。センターを代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日のテーマは「大学院指導の組織とシーケンス」ということでございます。私どものセンターが大学院教育についてのシンポジウムを開催するのは、比較的最近でも2011年度に続いて2回目ということになります。また、当センターではこうしたシンポジウムの内容を、後日皆さま方にお伝えするということを目的に、冊子に取りまとめてございます。

例えば、手元に持ってまいりましたが、「大学教育開発研究シリーズ」というもので、印刷もしておりますが、ウェブ上でもダウンロードできるというものでございます。大学院教育につきましては、シンポジウムの記録を含め3冊つくっております。本日のシンポジウムも本年度末にはそうした冊子として刊行する

予定でございます。私どもが、大学院教育のあり方をこのようにたびたび議論してまいりましたのは、今日ご登壇いただく寺崎先生のご指導の賜物でございます。

他方で、私はセンター長という仕事しておりますが、大学総長室の副総長という仕事しております。副総長という立場から申し上げますと、立教大学が大学院教育にどれぐらい真剣に向き合ってきたのかということについては、忸怩たる思いがございます。現在の吉岡総長が着任をされて6年目ということでございますが、この間に大学院教育のあり方について、もちろん議論はしてまいりました。今日ご登壇いただく加藤先生を中心にワーキンググループを設置して検討を進めてきたわけではありますが、それ以外の取組みといたしましては、認証評価に対応するために、努力課題として指摘をされた内容に対応するという、いわば消極的な対応にとどまっているところもございます。

立教大学が抱える大学院教育の課題というものは幾つかあるかと存じますが、昨今の課題としては、やはりどうしても大学院生の数が少ないということがございます。そうした場合に、少ない大学院生に対して、どれだけ組織的、体系的に教育の課程を見直していくのかという点は、非常に難しい問題でございます。

また、伝統的に大学院に進む学生は、それぞれいろいろなカラーを持っているといいますか、個性を持っている学生さんが多いですので、それぞれ関心が非常に分散するのが常であります。そのような大学院生に対して、組織的、体系的にどのような教育を展開していくのかということは、伝統的な課題というふうにも理解ができるかと存じます。

本日のシンポジウムを通じて、そうした幾つかの課題を解決する糸口が見つけられればというのが、私の期待でございます。今日ご登壇いただくのは、司会の松本先生を含めて、現在、学部長・研究科委員長であった



大学教育開発・支援センターセンター長、副総長、法学部教授

原田 久

り、あるいは経験者であったりという先生方です。そういう意味では、組織的に大学院教育に向き合ってきた方々ばかりでいらっしゃると思います。

短い時間ではございますが、お付き合いくださいますと幸いです。以上をもちまして、私の挨拶といたします。



第 1 部



【話題提供】

大学院制度の 原型という視点から

立教大学名誉教授、東京大学名誉教授
寺崎 昌男 氏

○司会 それでは早速、第1部の話題提供といたしまして「大学院制度の原型という視点から」というタイトルで、立教大学名誉教授、東京大学名誉教授の寺崎昌男先生にご講演いただきます。よろしくお願いいたします。

はじめに

○寺崎 こんにちは。寺崎であります。今日、私は体験も交えながら、話題提供としてなるべく簡潔にお話ししたいと思っております。

私が生まれて初めて大学院教育に携わったのは1971年でした。本学文学部文学研究科教育学専攻で、生まれて初めて大学院のゼミというのを持ったわけです。昨日のこのように覚えております。

その後、桜美林大学大学院が最後の勤め先でしたが、2002年にそこを辞めてこちらの調査役になって戻ってきたその年まで、大学院生を、ずっと間断なく指導してまいりました。その間、何を考えて指導したかという、結局のところ、勘とコツしかなかったですね。「自分の昔の指導教授はこのときどうされただろうか」。そういうことが浮かんで来るだけでした。それ以上のことはほとんどありませんでした。

ところが、2008年になりまして、当時名古屋大学にいらした近田政博先生（現在神戸大学教授）が『研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか』という本を翻訳されました。原著はオーストラリアのメルボルン大学の教員たちが書いたもので、大学院での研究指導のマニュアルです。その内容が非常に

印象的でした。「そうか、こういう本が出ているのか」と思いました。やがて、その本を手がかりにずっと探していくと、特にアングロサクソン系の大学すなわちアメリカ、イギリス、オーストラリア、それからカナダ、そういう国では大学院指導に関するマニュアル本がたくさん出ていることが分かりました。

それをセンターで次々に集めてみますと、大変面白いのです。それを自分で発表したり、あるいは若い方と一緒に読んだりしながら、本日入口のところにおいてある『大学院研究指導への誘い—海外マニュアルの紹介—』(大学教育開発研究シリーズNO.18)という1冊にまとめました。ぜひご遠慮なくお持ち帰りください。

そういう文献調査などを経まして、段々と本日のこのシンポジウムの場が持てるようになったわけです。私自身は3月で調査役を退きましたが、こういう集まりに出られることを非常にうれしいと思っております。めったにない機会を与えていただいたと思っております。

1. 大学院制度の始まり

以下、お配りしているレジュメに沿って申し上げます【レジュメ①】。

まず、日本に大学院制度というのが入ってきたそのころ、いったいどういう経過だったのでしょうか。1886年、明治19年に唯一の大学、帝国大学に入ってきたんですが、学部との併設の時代でした。学部は当時「分科大学」と言ったんですが、「大学は分科大学と大学院をもって構成する」となっていました。つまり当時の政府は、大学が大学であるためには大学院がなくてはならないという規定をいきなり明治時代の半ばに入れてしまったわけです。これは世界的に最も早い例で、そんなことを決めている国は当時ありませんでした。どこもつくっていないその制度を、日本は世界に先駆けてつくってしまったんです。

その後、「分科大学と大学院」という体制から「学部と研究科、そして必要なら大学院」というかたちが変わったのが大正時代です。このときに、分科大学は「学部」というものになり、その学部が学部であるためには研究科を置いていなくてはいけないということになりました。これはある意味では大変な退歩です。進歩ではなくて退歩です。どうしてかというと、学部というのは研究者養成もするところだ、という考え方がベースにあったからです。学部は研究者養成もする、そ

の名称は研究科という名前で結構で（これは現在の制度の中の「研究科」というものにつながっています）、幾つか複数の研究科を置く大学は大学院と称することもできる、こういう「許容的」な文言で大学院が規定されていました。つまり確実に学部本意の大学制度というのが大正時代に出来上がったわけで、これが1910年代のことでした。それがずっと最近まで続いてきたということになります。

そういう流れの中で、では大学院は教育機関と見られたかといえ、ほとんど見られていませんでした。何せ学部の中に統合されているんですから、特に大きい改革は不要だったわけです。ですから、カリキュラムというものもない、というのが旧制大学院を通した特質だったのです。

また、大学院を終わったからといって学位を得るものではないと考えられていました。学位というのは大学院を通して獲得するものではありませんでした。実際に大学院を通して学位を取った人はほんの一握りでございます。例を挙げれば皆さんにも誰か分かるような、そういう少なさでした。結局それは戦後まで続いてきました。

2. 占領下におけるアメリカからの導入 —単位制度と課程重視—

戦後になってから、今度は激動が起きたわけです。それがレジュメに書きました「占領下のアメリカからの導入」です。その導入には両面あって、専門家のガイダンスがあった部分と、それから、にもかかわらず大きく残った部分の2つを見出すことができます。

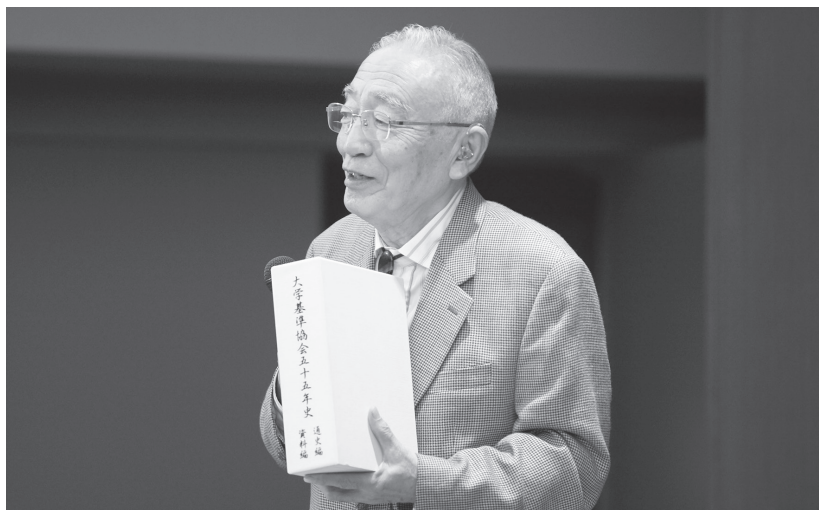
まずは専門家のガイダンスのほうをお話したいと思います。今から申しますのは、今日ここに持ってまいりました『大学基準協会55年史』という二冊仕立ての大きい本の中に入っています。大学基準協会は今、特別公益財団法人になっていますが、その財団法人が刊行した本で、私が監修をいたしました。この本の中にこれから申し上げることは全部詳しく書きましたので、ご興味のある方は後でご覧ください。資料も全部入っております。

このときアメリカ人たちは日本の学者たちに何を教えたか。まず日本側では、各大学の有力教授が集まって「大学院基準」というのをつくったんです。今の「大学院設置基準」とは違う、大学院基準というスタンダードでした。

そのときにアメリカの専門家たちが教えたことは、大学院には「単位制度」があるということでした。これを一番先に言っております。これは今、中教審がしょっちゅう言っていることですね。大学院改革の中心は単位制度の充実である、とずっと言っていますが、これはアメリカ人が我々に教えてきたことでした。そして、大学院というのは、単位制度に基づく graduate school である。「school」なんだと。かつては graduate course だったが、今は graduate school という呼称になっている。そして独立して専門職者を育成するところである、と教えています。したがって、学部からは独立した組織だということも彼らは強調しました。今までのように学部に付設された研究科では駄目だ、そうではない、独立している、このことを彼らは強調しました。

それから、次にゼミ、大学院での演習は「コースワーク」なんだと。単なるお遊びのサロンじゃない、ということも申しております。これも全部、近年、中教審が言っていることです。

ベースにあるのは何かというと、「課程重視」という考え方だとアメリカ人たちは言いました。博士だけを置いているからすごく難しいことになるので、中間学位というものを日本はつくったらどうか。中間学位はアメリカでは「master」と言っていると。日本にもそれを置くべきだということで、この訳語には当時、大学人たちが大変困りまして、「修士」というのを思い付くまでに、この本に書



いてある記録を読みますと七転八倒したんです。「院士」というのが有力だったらしいんですが、院士というとお位牌に書かれているような漢字だ、だから院士はやめよう、「特学士」はどうか、「秀士」は…などいろいろなことを議論したあげく、結局「修士」ならまあいいだろうということになったんです。

修士を取るコースを修士課程と言い、doctorを取るコースを博士課程と言う。アメリカ人たちはこれをはっきり決めるべきだということも申しました。これが課程重視ということですね。だから「博士課程」というのはdoctorを出すコースなんだと。つまり、ただ大学に置いてあるものじゃない、学生もいつまでもいいような場所でもない、これはコースなんだ、歩く道なんだということを言っていました。当時の記録を読みますと、今言われていることは全部、当時言い尽くされているということが、非常によく分かります。

Ⅲ. 戦後残された課題—行政と学界—

その中に残された問題ももちろんありました。

第一は、「独立した組織だ」と言われながら、当時の政府は大学院に対する財政的な裏付けをしなかったことです。国立大学に大学院予算はありませんでした。全部学部に組み込まれておりました。したがって大学院で独自に使える予算もないし、部屋も机も何もありませんでした。私は新制第3期の大学院生でしたが、本当に机一つありませんでした。大学院自治会で要求をして、やっともらったのがロッカー一つです。これだけでも大変なことでした。それも一つのボックスを3人で交代で使いました。そんなわけで、独立とはほど遠かったのです。当時は私学のほうが独立の教室棟をつくったりして、大学院生の待遇を厚くしておりました。

次に「学界」はどうだったかというと、いくら占領軍から言われても体質はそう変わりませんでした。人文社会科学系の先生方、特に東大でしたら文学系の指導教授だった先生方は、「博士は出すものではない」ということを、博士課程に入ってきた大学院生を迎えた挨拶で公言しておられました。「大学院に入っておめでとうと言いたいけれども、あなた方は、われわれから見たらとんでもないところに残ってくれたねと言わざるを得ない。これから3年たったら博士になれると思っている人があるとしたら、大きな間違いだ。3年経って取れるものが博士

ではない」と。今でも覚えておりますが、言語学系の大権威の先生が研究科長としてドクターコースの学生を迎えたときの最初のスピーチがそういう言葉で始まったそうです。「博士号というのは最後の論功行賞なんだ。死ぬ前にもう人はもらう。もらわなくなったら全然おかしいことはない」。こういうふうに言いました。

他方、理系や工学系の大学院では逆に、大学院は、修士学位はもちろんのこと、博士学位も出すのが当然、貰うのも当たり前、と考えられていました。小学校からの同級生に地球物理学をやった友人がいたのですが、かれらの場合など、博士課程3年修了、博士を取り、助手に就任、というのが既定のコースになっていましたし、修士号にいたっては東大も京大も「学部2年間では何もできない、修士を加えてはじめて大卒だ」などと言われながら大部分の学生が大学院修士課程に進学していました。つまり修士は学士号の代替物（ただし必須代替物？）の扱いを受けていたのです。一方、医学と言えど承知のように博士号を持つことは戦前から開業するにも必須のことで、新制大学院の開設当時から、そもそも修士課程はなく、博士課程だけしかありませんでした。

つまり、「学界」と一口に言っても決して一枚岩ではなく、分野ごとに新制大学院に残された問題は大きく違っていました。しかしそれでも、学位をめぐる状況は、法学・経済学を含む文科系と広い範囲の理系との間には、大げさに言うと目のくらむような違いがあったのです。

そして、「体系性」と「組織化」は必要ではないという考え方が根強くありました。入学の際に厳しい試験をやって絞ることは絞る、つまり選抜はしなくてはいけないけれども、「体系性」も「組織化」も、これは必要でない。つまり伸びるやつは伸びるが、伸びないのは伸びない、「ここに入ってきたのが間違いだったんだ」と言われれば終わりという、そういうのが大学院というものののだ、という観念が根強くありました。

海外の指導マニュアルが否定しているのがこういう大学院観です。入った者は厳しい鍛えられ方を覚悟しなければならないけれども、院生を迎えた側には、かれらを体系的に指導するという専門職者としての責任と義務がある、というのがマニュアル本の基盤にあるのです。

4. 今問われていること

以上見てきたような問題を抱えて大学院の「指導」と「学習」は始まったのですが、ここで将来に残された問題4点について述べておきたいと思います。

第一は、既に明らかなように、大学院の役割と本質にまで達するような基本的問題を抱えてきたのが広義の文系分野であることは明かです。この分野の大学院指導、特に博士課程の学習と指導、そして学位授与の3者の関係改善について、少しずつ改革が進んでいます。

私どものセンターでは、日本でその努力を続けておられる大学院の実践についてインタビュー調査を重ね、報告書を出しました(『学位取得へ導く大学院教育のあり方―博士後期課程を中心として―』(大学教育開発研究シリーズNO.15、2012年2月)を参照して下さい)。中教審などはそういう実例をしっかりと研究するべきだと思います。

他方、理系では「プロイラー方式」(＝科研費その他の細分的分担をさせることにより院生たちを賄うが、自立への指導はしない)か「放任方式」(＝指導をしないでただ放任しておく)か、といった混乱した指導様式を改善することが大きな課題になっています。

第二に、どのような体系性と組織化が必要かということです。もうすでに触れましたが、大学院のゼミをコースワークにふさわしく活性化し、特に博士学位へのステップというか、順序や手続きを公明にしておくことなどは大変重要だと思います。相当有名な大学院でも、「先生が『出せ』というまで博士学位の申請はしてはならないことになっている」という状態に置かれている院生がたくさんいます。聞いてみると、その教授も学位を持っていない、というような例も珍しくありません。こうした実態の上では組織化も体系化もあったものではないと思います。大学院の学科目と研究指導との相関や、シーケンス(順序)をきっちり付けることなども大事な課題になっていくに違いありません。

これらに加えて、大学院生の研究の段階がどの辺にあるかということを熟知しておくというのも指導者の重要な務めで、その知識に即した指導を行なうのが、指導の「シーケンス」というものでしょう。

体系性や組織性と交差して、そうした「適時性」といったものも、今後大いに求められるテーマでしょう。

それから、第三に、今分らないのは研究者としての「自立して研究活動を行う」能力、これは今の大学院設置基準に書いてあります。博士号の基本資格は「研究者として自立して研究活動を行う能力」、こう書いてあるんです。悪くないと思います。これに変わる前は何と書いてあったか。われわれが取りにくかった昔、その頃を書いてあった文言は「独創的研究を通じて学界に貢献し、さらに後輩に対する研究指導能力を発揮することを通じて社会の文化的発展に寄与する」というもので、今考えると恐ろしいことが書いてあるわけです。それが博士課程の資格だったんです。

どれ一つ取ったって猛烈なものでしょう。取れないのが当たり前というような文言になっています。これは僕らの頃まで、1970年代の半ばまでその規定でした。それがやっと70年代の後半に変わってきたわけです。学術博士というのが生まれたり、いろいろな形で変化がありました。

さて最後に残った第四の問題は、博士を出し過ぎるとその学界の水準は下がるかということです。これが今後は特に大きい問題になって行くと思われます。多くの人が、博士を出し過ぎると学界のレベルが下がると恐れております。

確かにアメリカにあるような、お金をもらってどんどん博士号を出す大学もたくさんあります。そういう大学のことを「degree mill」とか「degree factory」と言うそうです。日本にもそういうfactoryにはなりたくないと思っておられる大学も多いですね。

ただし、博士号を出し過ぎるとレベルが下がるという話自体は、実はやや眉唾の話です。必ずしもそうではないのではないかと私が思ったのは、いつか科学史の専門の方と議論していた時でした。その方によると、博士号はむしろたくさん出したほうがいいと言うんです。たくさん出すと、周りの人が「自分も博士になれる」と元気づいて、活発に研究を始め、結果的に博士号をたくさん取るようになると言うんです。

医学が一番いい例であります。旧制の博士号は1956年まで続きました。その年まで旧制博士が出たんです。その博士の総数は、約9万人でありました。その中で、医学博士は7万人でした。いかに高い率だったことでしょうか。つまり、お医者さんは誰でも博士になるのが当たり前という今の状態は、旧制時代からずっとあったわけです。

では、日本の医学研究の水準はべらぼうに低いか、そんなことはないでしょ

う。ノーベル賞の医学生理学賞をもう3人も出しています。ああいうことを見ますと、博士号をどんどん出すからレベルが下がるということはない。むしろ出したほうがいいというふうに私は思います。私自身はちょうど34歳ぐらいのときに幸い教育学博士号を取りましたが、非常によかったと思っています。とにかく取るべきだというふうに思います。

それから、別の問題として、博士号というものの領域による違いを、私どもは確かめておく必要があると思います。領域によって博士の価値が違う。今日は幸い文学研究科の先生と、理学研究科の先生とご発表になりますから、その辺がだんだん分かかるとは思いますが、博士号はやはり領域によって値打ちが非常に違います。

他方で、違うにもかかわらず、共通した手法があるということも重要です。この共通した手法のところの開発をわれわれは怠ってきた、これは言えると思います。先ほど申しましたマニュアル本を横に並べてみますと、幾つかの点で非常に共通したところがあるんです。国ごとに違います、領域ごとに違います。違いますが、それらの実践的な差異というものを乗り越えたいわば実践の方式に共通性というのがあるんです。

例えば、私が読みましたマニュアルの一つに、非常に挑戦的なマニュアルがありまして、挑戦的というのは、あるイギリスの若い学者が書いたものですが、そ



これは大学院における研究指導はパラダイムの形成に役に立っているんだと言っています。つまり、学界で共通に公認されている問いと答えの様式ですね。それをパラダイムと言うとすれば、うっかりすればパラダイムを定着させるためだけに研究指導はある、ということを書いている。その指摘はなかなか面白い。

ただ、にもかかわらず、こういう言葉を引用して見せてくれています。「研究の最終段階では、今のようにパラダイムを指導するということになったとしても、コミュニケーションという能力が極めて必要だ」と。また、例えばこういう文章を彼女は引用しています。「私はいつもすべての指導生たちに対して、次のことを分らせるようにしています。それは、君の論文のテーマは、君が考えているよりもずっと広い専門分野と文脈においてつながっているのだということです。また、私は指導生たちが一人残らず実力ある専門家になること、言い換えれば、彼らの専門分野のトピックについて広く表面的なことを知っているだけといった人たちとは違う、はるかに力のある専門家になってほしいと思っています」(拙訳)。こういう奥深い能力を持つ専門家ですね、これを目指しているんだということを書いて。つまり、大学院によって鍛えられる専門性は、決して細分化された底の浅い断片的なものではなくて、むしろ力のある専門家としての専門性だ。この点に着目することが、私は非常に重要だと思います。

結局、彼女自身が言っていることは、大学院の学生たちが、さまざまな知識を



構造的に持ちながら、いずれ学位に対するいわば門衛、ゲートを守る人間として働くことができるような人物にならなければならないということです。当然のことながら、そこへ至るために指導のステップが必要だということになります。

したがって、今日のテーマであります「大学院指導の組織とシーケンス」、特にシーケンス（順次性）の問題ですね。これは非常に大事な問題であり、われわれが学ぶべきことではないかと思っております。ちょうど時間になりました。ありがとうございました（拍手）。

○司会 寺崎先生、どうもありがとうございました。格調高いご講演で、ますます重い問いが突き付けられたというところかと思います。特に「おわりに」のところでは、どんな体系性と組織化が必要か、研究者としての「自立して研究活動を行う」能力とは何か、検討すべき課題として順次性という問題がある、それから、その前提として改革の必要性は特に人文・社会科学系が中心である、といったようなご指摘をいただいております。そのオープンクエスチョンをどこまで深められるかということになるわけですが、第2部では2つの事例報告を順番にさせていただくことになります。

【レジュメ ①】

大学教育開発・支援センター主催シンポジウム (2015.11.10)

大学院制度の原型という視点から

寺崎 昌男

はじめに

1. 大学院指導の“体験” —1971年～2002年 カンとコツ
2. 海外におけるマニュアル本の探索

I. 大学院制度の導入—1886 (明治19) 年

1. 併立 (1886～1918、分科大学と大学院) から
学部付設 (1919～1952、学部に研究科を置く) へ
2. アメリカ型大学院情報は稀少

II. 占領下のアメリカからの導入 (1) —GHQ内専門家のガイダンス

1. 単位制度の導入 —schoolである：学部から独立
—ゼミはコースワークとして
2. 課程重視—master, doctor 二種制
3. 博士課程—doctorを出すコース
[参考文献] 大学基準協会年史編さん室編 (2005)『大学基準協会55年史 通史編』.

III. 占領下のアメリカからの導入 (2) —残された課題

1. 行政—予算ナシ、設備ナシ
2. 学界—人文社会科学系：博士は出すものではない
—理系、工系：出すのが当然
—医学系：出すもの、修士課程ナシ

おわりに

1. 改革の必要性は人文・社会科学系が中心
2. どんな「体系性」と「組織化」が必要か
3. 研究者としての「自立して研究活動を行う」能力とは何か
4. 博士を出し過ぎるとその学界の水準は下がるか？

以上

当センターがこれまでに刊行した報告書目録

1. 『立教大学大学院の現状と課題を考えるために』(2007年6月)
 2. 『大学院教育に関する大学院生・教員アンケート報告書』(2008年12月)
 3. 『博士後期課程の一層の充実に向けて—学位へのステップを整える—』(2012年4月)
 4. 『学位取得へ導く大学院教育のあり方—博士後期課程を中心として—』(2012年2月)
 5. 『大学院研究指導への誘い—海外マニュアルの紹介—』(2013年5月)
 6. 『海外大学における博士号取得—立教大学教員の体験をきく—』(2015年6月)
- ※ 1～3は学内向け報告書。4～6は学外にも配布。

第2部

博士後期課程の「指導」とは —文学研究科の場合—

副総長（研究推進担当）、文学部教授
加藤 睦 氏

○司会 最初の事例報告は「博士後期課程の「指導」とは—文学研究科の場合—」というタイトルで、研究推進担当副総長で文学部教授の加藤先生にお願いいたします。

はじめに

○加藤 加藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私からは、博士後期課程の指導について、立教大学大学院の「文学研究科の場合」ということでお話をさせていただきます。

私は研究推進担当副総長という立場にありまして、立教大学の大学院改革といいますが、教育の点検・改善といいますが、そういう仕事を担当しているわけですが、本日は、そういう大きな立場から、今後立教の大学院教育をどうしているかと思っているのかということをお話するのではなくて、一文学部教員として話をさせていただきます。掲げたテーマで、博士後期課程の「指導」と、かぎ括弧がついているあたり、そもそも博士後期課程で「指導」は可能なのかという疑問を含んでいるわけで、組織とシーケンスという観点を持って文学研究科の博士後期課程の指導を考えていくことは、やはりなかなか難しい問題があるということを前提に、いろいろとお話をさせていただきたいと思います。

1. 原体験

2枚目のスライドに制度的なことをざっと記しておりますが【スライド①-2】、それに先立って、私自身のことをお話ししますと、私は1983年に、今でいう博士後期課程に進学いたしました。そのときに指導教授から言われたことははっきり覚えております。「君たちは既に研究者である。僕のライバルである。[指導]というようなものの対象ではない。したがって、僕の前期課程や学部の授業などに出てきてはいけません」と。後々、今日のこの報告が活字になりますと、何か過去への恨み言のように響くかもしれないわけなんですけど、実はそうではなくて、当時われわれ院生たちは、その言葉を聞いて誇りしかったという記憶を持っております。一人前として扱ってもらっているというふうに、何かうれしい気持ちがいたしました。

ただ、そういう記憶あるいは感動をずっと持ち越して大学教員になり、それをそのまま反復して、「君たちは自立している」なんていうふうに昨今の大学院生に言っては、やはりよろしくないわけで、指導は指導としてきちんと行なっていくべきであると今では思っております。

2. 学位取得までの制度的シーケンス

さて、文学研究科の場合、1年次から3年次までの間は、4月と、それから7月、1月にやることが決まっております、まず「研究計画書」を提出し、それから半期に1回「研究報告書」を提出するというように制度化されております【スライド①-2】。

特に1年次の4月の研究計画書提出に先立っては、指導教授と副指導教授が決定いたします。学生の希望も踏まえながら、教員相互でも調整をはかりながら、正と副の指導教授が決定いたします。次いで、正の指導教授が担当する院生と面談を行ない、どういうテーマに取り組んでいこうか、どういうふうな計画で研究を進めていこうかという、学位申請論文の完成に向けておおよそのテーマ設定と計画構築をいたします。ここはもう文字通り指導が実質化しているところでありまして、めいめいの教員が指導者として有効な助言を与えているはずで。

これが順調にいきますと、2年次の年度の終わりのころ、「博士論文中間報告書」

を提出するということを文学研究科では義務付けております。これについては後ほど説明いたします。さらに順調にいきますと、翌年11月には、「博士学位申請論文提出」に至るという、こういう運びになってまいります。

3. 文学研究科における研究指導—履修要項より—

文学研究科における研究指導については、履修要項にはこのように書いてあります【スライド①-3】。「後期課程の学生は、専攻の定めるところに従い、担当の指導教授より研究指導を受けるものとする。その際、単位制はとらない。指導教授は、文学研究科教員がこれに当たり、正・副各1名とする。なお、指導教授の変更を必要とする場合は、これを認めることがある。」と、こういうふうに淡々と書かれておりますが、実はこの「専攻の定めるところ」なるものが、必ずしも各専攻において院生に明示されているとはいいい難い状況がございます。

これは、実際は無理からぬところがあって、各専攻ごとに、「これこれこのように指導を行う」ということを明快かつ具体的に示すと、その後実際に院生と指導教員の間で、研究の進捗ですとかテーマの性格によって、必ずしもそのとおりにいかないというようなことも起きてしまいます。ここが非常に難しいところで、よくいえば院生の実状に即して柔軟に対応していく、個別に柔軟に指導して



いくということなのですが、悪くすると、易きに流れるということも起きかねないというところがあります。

あるいは、院生が、自分がどのように指導を受けているのかよく分からなくなってしまうということが途中で起きることも懸念されます。研究計画の助言を受けているところでは、もう明解に指導を受けているという実感が持てるでしょうが、その後が問題で、自分は全体の計画のどこにいるんだろうとか、何を指導されているんだろうかということが分からなくなってしまうという、そういうことが起きかねないと思っております。

4. 博士論文中間報告書という関門

それから、標準的には2年次の終わりごろに出す博士論文中間報告書ですが、これは立教大学の各研究科に共通の制度ではなくて、文学研究科の制度としてご理解いただきたいと思います。

この中間報告書の構成としては、博士学位申請論文の主題・構成の概略が明らかにするような章立てと、論文執筆のための基本的構想および論文の中心になる論旨、それから、予定される論文の序章、あるいは数章を盛り込んで、最後に詳細な参考文献リストを付すという、こういうことが求められております【スライ



ド①－4】。

この作成と提出は、院生たちにとっては大きな関門でありまして、心理的にもプレッシャーがかかって、これを提出するに当たってはかなり緊張するようです。

われわれ教員の側は何をするかと言いますと、提出された中間報告書を読み、正副指導教授の2名に、他の専任教員も加わって口頭試問を行い、受理、不受理を審査します。受理されると、翌年博士論文を出す資格が与えられるが、ここで不受理になりますと、「もう一年待て」「もっと修行しろ」ということになります【スライド①－5】。

実際には提出に先立って、正の指導教授が博士論文中間報告書をきちんと書けるところまで研究が進んでいるということを確認したうえで、提出されてきますから、不受理なんていうことは普通は起きないわけですが。

実は、その口頭試問の際に、院生本人以外にもう一人緊張している人間がいて、これは正の指導教授であります。この口頭試問はかなり厳しいので、あまり院生がこてんぱんにやられると指導教授が助け舟を出したりすることも起きてきて、これはなかなか厳しい場になっております。

しかしながら、基本的にはそうやって厳しく批判なども受け、問題点も認識した揚げ句、ちゃんと受理されて、さらに次のステージに進んでいくということで、学位論文完成に向けて有効な関門となっているといえます。

【5.一里塚としての学振特別研究員申請

以上が、私の所属する文学研究科の教育機関としての仕組みで、どういうふうな段取りを踏んで、どういう関門を経て学位取得に到達していくかという、そういう学校としての仕組みですが、実際に大学院生が成長していくときに、ほかにその成長を促していくものとして、あるいはわれわれ指導教員が目安にしているものとしていろいろあると思うんですが、一里塚のような機能を果たすものの一つが学振(学術振興会)の特別研究員の申請スケジュールだと思っております。

皆さまご存じのことだと思いますけれども、またすべてを載せているわけではありませんが、かいつまんで言うとうこういう形になっています【スライド①－6】。DC1は「前期課程2年次の4月～6月」に申請するもので、非常に早い申請時期になっております。なかなかこれに対応できないというのが、指導する立場とし

て正直なところです。

後期課程に入ってから、1年次に入ってきてすぐDC2の申請時期がまいります。これは翌年も申請できますが、できればこれに申請して、かつ採用になれば、院生にとっては経済的にも非常に助かりますし、「箔」もつくなど、いろいろいいことがついてくるということがございます。

それからPDです。これは後期課程3年次、あるいはそれ以降のやはり春先に申請時期がまいります。これを意識して、これにちゃんと申請できて、かつ採用されるような院生の育て方や計画の立て方というのが、あってよいのではないかと考えております。

ただ、すべての院生に対してこれを求めるというのは難しい面もあります。研究テーマの性格ですとか、あるいは留学生であるとか、また例えば家庭の事情でそんなに多くの時間を研究に割けないといった事情を持っているとか、個別もろもろの事情が院生にはあります。ですから学振の申請スケジュールをすべての院生に明示して、これに対応できるようにがんばれというふうな形をなかなか取りにくいところがありますが、教員の側はこれを意識しておいて、そしてすべての院生に申請スケジュールの全体像を早めに伝達して、それで心構えはさせておくぐらいのことは必要だと思います。

こういうことに関して、大学教員には大雑把にいて二つのタイプがあり、研究業績を積みせることに熱心な、鍛えるタイプの教員と、わりあい大らかに、大きなテーマにゆっくり取り組むことを好ましいと考えるタイプの教員がいると思います。私自身は、目先の業績にとらわれるのはよろしくないと、本音では思っておりますので、どちらかというと後者のほうですが、この事例報告を担当するにあたって、今回いろいろ聞き取りをしてみると、どちらのタイプの教員についているかで、やはりだいご得られるものが違うし、成長の仕方が変わってくるといことがあります。

ですから、指導教員の方針によって、あるいは学生の属性によって、もちろんそれぞれあっていいのだと思いますし、指導の仕方あるいは計画の立て方についてなかなか平準化できないということは確かですが、そこで行き詰まってよいとも思われず、学振の特別研究員の申請・採用を意識しながら指導を行なうのは、研究の促しの一つのいい目安にはなるであろうと思います。

Ⅵ 6. 院生の成長のモデル

先ほど申しましたように、私はどちらかというと、大きなテーマを深くゆっくり考えて研究を進めていくことを望ましいと考えております。ですが、実際に院生が特別研究員への申請を考えていれば、申請書の添削もしますし、添削の腕に対する自信も持っています。しかし、本音として、研究員への採択を目指して「がつがつ」やっていくように指導すべきだとは思っていませんでした。しかし、よその研究室の院生も含めて複数の院生の育ち方、真面目にこつこつ論文を書きためて成長していく院生を何人か見て、やはり考え方は変えなければいけないと思いました。院生から、ある意味学んだところがございます。

これは、特定の1人の院生のことを書いているのではなくて、実際は3人の院生がどういうふうに業績を積んでいったかということの一つのモデルとして提示しております【スライド①-7、①-8】。ただ、3人のやったことを合体・合算してスーパー院生となっているということではなくて、その3人が、それぞれだいたいこんな感じの業績の蓄積の仕方をしていたという、統合したイメージでございます。以下、「この院生」というように呼ぶことといたします。

この院生は、前期課程2年次で、もう既に学会に研究発表をしております。さらに、他大学の学術雑誌に共著論文を掲載したりしています。それから、学内の雑誌が幾つかありますので、それにも論文を掲載しております。

このうち、共著論文は、他大学の研究会に出ていて、そこの教授から「うちの院生と共著でこの成果を活字化しなさい」と言われて、つまりよその大学である種の指導を受けて、それで書かせてもらったというものです。こういうふうに早くからどンドン学外に出ていくというのは非常に重要な成長のモデルだというふうに私は思っております。

後期に入るとDC2に申請して結果として採用されていますが、これは査読有の学会誌の審査に通って7月に掲載見込みというような状況だったので、それが申請書に書けるということがございました。それが効いたのか、そのほかにもいろいろなファクターがあったかとは思いますが、結果として翌年4月から採用になっております。

こういった院生の一つの特徴は、査読に落とされることを恐れずにどンドン論文を書いて投稿しているということです。この院生を指導している教員が「落ち

てもいいからどんどん書け」というふうな指導をしている様子を何度も目撃したことがあります。その教員は、「学会でもどんどん発表しろ」「学内の雑誌にも書いていいが、できれば外の学会誌に投稿せよ」という、そういう育て方をしておりました。ですから、後期課程2年はほぼ同じような感じで業績を増やしてっております。

3年次になってPDに申請して、学会誌にも引き続き論文が掲載されています。それから国際学会でも発表したりして、とにかく学内で研究指導を受けて、博士論文に着々と進んでいくという、「学校」内での育成とは別に、学術論文をどんどん書いて、研究発表もどんどんしていくという経過です。

学振特別研究員の申請スケジュールというのはちょっと早すぎる、もうちょっとゆっくりしてくれないかと正直思いますが、この院生の研究の進め方を見ますと、改めて院生の研究を促すための目標として有効だと思います。この院生の場合、実際に論文を投稿したりするときに、私が正の指導教授の場合もありましたし、副の場合もあったわけですが、「こういう論文を書いたけれど見てくれないか、チェックしてくれないか」といって求められたときに行う指導というのは、具体的に、非常に手応えがあるものであります。教員にとっても院生にとっても、「指導」によって論文が改善されたという目に見える研究上の改善がありまして、こういう点から見ると、やはり後期課程の指導というのは、まず学生が何かを書い



て、それに対してこちらが指導するというのが基本なのではないかと思います。学生を研究者として一人前に育てていくには、前以てどういう方法を伝授すればいいかという、そういう抽象的なことではなくて、あくまでも学生が形にしようとしているものの生成過程に具体的に関わるのが望ましい指導の形だと考えます。

7. 他研究科の制度的シーケンス

文学研究科の場合、博士論文中間報告書を出し、それに対して口頭試問を受け、そして、それをパスすれば博士論文執筆の資格が得られますが、他研究科では別の仕組みをもっています。どういう仕組みになっているかというと、予備審査会という制度を持っている研究科が相当数あります。その中で、例えば経済学研究科は予備審査会を通らなければ博士論文は提出できないのですが、その予備審査会で報告を行う資格も定められているんです【スライド①-9、①-10】。1番目はほかの研究科でも同じ条件ですが、2番目として「2編以上の審査論文を公表していること」、3番目は「学会発表を1回以上行っていること」。それから、その他の業績も含めて、「業績点の合計が15点以上であること」。このように点数化されたものが示されています。この2～4の業績については提出しようとしている学位申請論文と同一のテーマを扱っていることという条件も求められています。

この資格の設定のしかたを見ると、博士後期課程で学位取得に向かっていく過程として、個別に研究発表を積み重ねていきながら、しかも学会で発表し、査読論文も書き、という形で研究を進めていくべきであるというモデルをはっきり意識していることが分かります。当然一気にこの資格要件を満たすわけにはいきませんから、早くから業績を蓄積していかなければいけませんし、それを実行していくと、先ほどお見せしたような文学研究科の「院生」のモデルに近似するものになると思います。

しかし、文学研究科の場合、中間報告書の提出に関してこういう要件を設けていないので、誰もがこれを満たしていこうということにはなっていません。その分、よきにつけあしきにつけ指導教授の「柔軟な」指導も可能になります。ですから、経済学研究科のような要件を文学研究科が設けるべきか否かということは、

簡単に結論が出るものではありませんが、一方で、文学研究科の各教員が院生に対して明示しないまでも、「これこれこういうふうに育てていこう」というモデルをいくつか共通して持っているということはやはり重要なのではないかと思います。

8. 研究指導へのアンビバレントな思い

指導によって、院生を本当に研究者として自立できるように育てられるかということになりますと、これはとても難しいことです。研究方法は自分で編み出すことが重要ですし、そういう意味でも「指導」には限界があると思います。しかし、難しいからといって、「指導」を軽視して、学位の取得に向けての指導のプロセスとか目標の設け方とか、そういうこと全てが柔軟になりすぎると、やはり問題があります。

ですから、一人前の研究者に育てていくということをあんまり重く受け止めないで、差し当たり学位申請論文を完成させるところまでは確実に導こうというように、「指導」の意義を限定的に捉えることを、われわれは追究していかなければいけないのだろうと思っている次第です。

私自身も試行錯誤している真っ最中ですので、しかるべき「指導」を実行する



のはなかなか難しいという自覚もございますけれども、以上で私の報告とさせていただきますと思います。どうもご清聴ありがとうございました（拍手）。

○**司会** ありがとうございました。具体的な手順が分かるような報告で、特に論文指導を通じての指導に手応えがあるというお話が印象的だったかと思います。

【スライド①-1】

博士後期課程の「指導」とは
ー 文学研究科の場合 ー

加藤睦(文学部)

大学教育開発・支援センター主催シンポジウム

【スライド①-2】

入学から学位取得まで

1年次～3年次

4月:研究計画書提出

7月 & (1月):研究報告書提出

2年次

1月:博士論文中間報告書提出

3年次

11月:博士学位申請論文提出

【スライド①-3】

研究指導

後期課程の学生は、専攻の定めるところに従い、担当の指導教授より研究指導を受けるものとする。その際、単位制はとらない。

指導教授は、文学研究科教員がこれに当たり、正・副各1名とする。なお、指導教授の変更を必要とする場合は、これを認めることがある。

【スライド①-4】

博士論文中間報告書

博士論文中間報告書には、博士学位申請論文の主題・構成の概略が明らかになるような章立て（目次案）と、論文執筆のための基本的構想および論文の中心なる論旨、かつ予定される論文の序章もしくは数章を盛り込み、最後に詳細な参考文献リストを付すものとする。

【スライド①-5】

中間報告書の審査

博士論文中間報告書の受理・不受理の決定は、正・副指導教授を含む3名の専任教員による口頭試問を経た上で、研究報告書締切日の前に本人に通知される。

博士論文中間報告書を受理されたものは、休学期間を含む翌2年度の間、博士学位申請論文提出資格を得る。

【スライド①-6】

学振特別研究員申請スケジュール

DC1

前期課程2年次の4月～6月

DC2

後期課程1年次(&2年次)の4月～6月

PD・SPD

後期課程3年次(以降)の4月～6月

【スライド①-7】

業績の蓄積(複数の院生のケースを統合)

前期課程2年次

- * 学会において研究発表
- * 他大学の学術雑誌(査読無)に共著論文掲載
- * 学内紀要に論文掲載

後期課程1年次

- * DC2に申請(→採用)
- * 学会誌(査読有)に論文掲載
- * 学会において研究発表
- * 学内紀要に論文掲載

【スライド①-8】

後期課程2年次

- * 学会誌(査読有)に論文掲載
- * 学会において研究発表
- * 学内紀要に論文掲載

後期課程3年次

- * PDに申請(→採用)
- * 学会誌(査読有)に論文掲載
- * 国際学会で研究発表
- * 学内紀要に論文掲載
- * 学位申請論文提出(→学位授与)

【スライド①-9】

他研究科のケース(経済学研究科)

予備審査会報告資格

- (1) 経済学研究科博士課程後期課程に在学し、しかるべき研究指導を受けていること。
- (2) 2編以上の審査論文を公表していること。ただし、掲載が確定している場合は未公表のものも含めることができる。
- (3) 学会発表を1回以上行っていること。

【スライド①-10】

(4) 業績点の合計が15点以上であること。単著書:7点
審査論文:5点 無審査論文:3点 学会発表(国内):2
点 学会発表(海外):2点 研究ノート:2点 共著書・共
著論文および審査論文に準ずる論文の取扱いについて
は、実態を確認して判断する。

(5) (2)～(4)の業績は、提出しようとしている学位申請
論文と同一のテーマを扱っていること。

(6) 共著書、共著論文は執筆箇所が明確でなければ
ならない。

博士(理学)への道



理学部長、理学研究科委員長
北本 俊二 氏

○司会 続きまして、2つ目の報告といたしまして、「博士(理学)への道」ということで、理学部長、理学研究科委員長の北本先生に報告していただきます。よろしくお願いします。

はじめに

○北本 理学部長の北本です。どうぞよろしくお願いします。原田副総長から、研究科委員長はずいぶん考えているはずだというお話がありましたが、僕は4月に研究科委員長になったところですので、この機会に考えさせていただこうかと思っております。

加藤先生のお話をお聞きして、他の研究科はずいぶんしっかりやっているのだなと思いました。報告の依頼があった時に、「理学部が一番整っているのじゃないか」というので、その事例を報告してほしいと言われたのですが、どうも違うなというのが率直な印象です。

また、寺崎先生のお話に、「昔は博士を取るのが難しかった。あるところから理工学系は博士を取って当たり前ということになっている」という話がありました。私は1985年に博士を取得しましたが、時代とともに状況がずいぶん違っていたことを知りました。

分野間の違いについても、あらかじめ加藤先生のお話と対比させたような話ができればよかったのですが、それは後のディスカッションでできればと思います。報告のタイトルは「博士(理学)」と書いていますが、分野によってやっぱりずい

ぶん違います。「理学」「理工学」といっても、私は特に物理で天文系の研究をやっておりますので、それに偏った話にならざるを得ません。一応、理学研究科委員長ですので、他学科、あるいは物理の中でもほかの研究室のこともある程度知ってはいます。しかし、どうしてもあまり細かいことはお伝えできませんので、私の研究に関連する物理学、天文関係に偏った話になっていることを申し上げておきます。

今回の話の内容は、まず博士課程、特に後期課程というのはどういう研究をしてどういう論文を書くのかという話です。それから、研究のスタイルというのをいくつかに分類してご紹介します。私自身は、大規模プロジェクトに該当するのですが、それ以外のところも含めてご紹介します。最後に「組織・体系化？」です。クエスチョンマークがついているところがみそですが、先ほどの加藤先生のお話を聴いても、むしろ、理学研究科は遅れているのじゃないかという気さえいたします。この点は今日ご理解いただけるかと思いますので、われわれは今後どうすべきかという問題として受け取っていただきたいと思っています【スライド②－2】。

1. 博士論文とは一履修要項よりー

最初に博士論文というものについてです。理学研究科の履修要項にこのように書かれています。2種類あります【スライド②－3】。

1つは「申請者の自著論文」（①の論文と呼ぶことにします）、もう1つは「申請者の自著または共著論文の中から、申請者自身が寄与した部分を取り出し、これを主体として、あらためて単一の主題のもとに作成した論文」（②の論文と呼ぶことにします）です。2つ目のものには「なお書き」として、「この形式の論文を主論文として提出するときは、その素材となった自著または共著論文を、参考論文として提出するものとする」という記述があります。

私自身は、①の論文と②の論文で大きな違いがあるように思っています。というのも、博士号を取って就職、特に研究者としての就職を考えた場合、単に「博士論文を書いて博士号を取りました」、「一編博士論文があります」では、多分就職は無理だろうと思います。おそらく現状はそうでしょう。これは寺崎先生のお話にあったように、分野によってずいぶん博士の価値が違うというのもございまして、理工系は「博士を取って当たり前」というような風潮があるということが、

まさにこのことにつながるのだと思います。

2. 博士論文だけでは不足 —ジョブを得るための業績が不可欠—

就職のためには、少なくとも論文の数が必要です。僕が立教大学に応募した時に、論文リストの中の博士論文にマークをつけさせられましたが、通常どこかに応募する際、博士論文がどれか書きません。博士号を持っていることは書きますが、とにかく論文リストをバーっと書くのが通常です。その論文リストというのは、理工系では雑誌論文で査読つき、査読なし、あるいは国際学会の集録とかに分類して書くのが通例になります。

ということは、「博士課程の間に博士論文を一生懸命書きました」ということだけだと、どんな立派な論文を書いても、まず次の職、PDあるいは助教でしょうが、その職に応募する時に困ります。その後たくさん論文を書いて挽回すればいいのかもしれませんが、現実として職を得るという点では非常に厳しいでしょう。

だから、博士論文だけ書いていたら駄目なので、②の論文を目指す方が得策です【スライド②-4】。自著または共著論文の中から自分のところを取り出してま



とめる、これを目指すのが普通になるのではないかと思います。①の論文に近いものでも、これは雑誌論文を想定したようなものということになるのだと思います。大学によっては本当に雑誌論文と同じものが博士論文になるということもあります。

ですから博士論文ばかりを見ているとその後が大変なので、実際には「次のJobのため」というのは言いすぎかもしれませんが、「国際学会などへ行って発表しなさい、そのときは集録を書きなさい」、「とにかく査読論文を出しなさい」と指導します。一番重要なのは雑誌の論文、特に査読つきのものです。通常、査読論文が何本あって、first authorがいくつあってということで点数化されます。最近では、citationがどれぐらいあるかとか、そういうことでも点数がつきます。助教などの採用では、まずはその点数を比較されますから、とにかく、雑誌論文を書くことが必要です。博士課程の期間に、とにかく論文を書きなさい、論文を書きなさいと指導します。そうすると、おのずと博士論文ができます。【スライド②-5】。

3. 研究スタイル①理論

ただ、論文を書きなさいと言うにしても、研究のスタイルというのは分野によってだいぶ違います【スライド②-6】。

物理を念頭に置いているので、他分野だと少し違うかもしれないのですが、例えば理論物理学の場合だと、割と少人数で論文を書きます。ドクターコースの学生でも単著の場合もあるんですね。とにかくたくさん論文を書くということも非常に重要です。理論の分野にもよりますが、例えば1年間に10本もの論文を書く分野があります。citationも1年間に100を超えて、数年たったら1,000というのがあったりします。論文がたくさん出るから、citationも多いわけですが、そういう分野もあります。

そういうところは新しいことが分かればすぐ論文です。逆にいえば、すぐ論文にしないと少し遅くなっただけで論文にならなくなるかもしれないわけですから、スピードはすごく重要です。私は幸運にも、この分野にはいないわけですが。

先ほどから話題にしているような少人数で論文を書く分野では、ファーストオーサーになりやすいということもあるし、著者が2人ぐらいだったら、2番目

でもファーストオーサーとあまり変わらないように評価されます。ドクターを終わる頃には数本から10本ぐらい出版しているのが普通ではないかと思います。ただ、例えば大規模計算機を半年回さないと結果が出ないような、そういうことをやっている人はもちろん話が違うでしょうね。

ここで大事だと思われるのは、激しいアイデア勝負というのがあるわけですね。そうすると、ほかの人がどんなことを考えているのだろうとか、自分のアイデアは本当に新しいのだろうとかか知らないといけません。ですから、他大学に行ったりして同業者あるいは異種業者と交流をして、新しいアイデアをどんどん生み出す必要があります。学会、研究会、セミナー、そういうところに行って議論をして、共同研究になる場合もあるし、アイデアをパッと思い付いて論文につなげられる場合もあります。こういう点で東京の大学は得ですよ。大学などがたくさんありますし、研究会も多いですから。これは僕が東京に来て、ずいぶん実感したことです。大阪と比べてもずいぶん違うことが分かりました【スライド②-7】。

4. 研究スタイル②小規模実験

小規模実験というのは、言ってみれば、自分が所属している研究室で実験ができるというものです。化学や生物は割とこれに近いかと思います。物理でも物性物理などは研究室の中で装置を持っていて、そこで実験をして、データを出して論文にしていきます。もちろんそういう研究室でもいろいろな研究所に行ったりはしますが、自分のアイデアをもとに自分の研究室でコツコツと研究をしていくということが主体となります。

多くの研究室には「こういうことをやらせれば、どこにも負けないよ」とか、「うちはよそにはないような装置を持っていますよ」とか得意技があります。その得意技をもとにしていろいろな論文を書けるわけですね。装置というのは普通に買ってくるわけではなくて自分たちで手を入れたり、あるいは会社と一緒につくったりするわけです。そうすると、よそには真似のできない装置となります。

そうやって小規模実験の場合は個々の研究室で実験をしていくわけですが、この場合でも、同業者、異種業者と交流が必要です。さっき言ったように得意分野、得意技があると、それらの得意技同士を組み合わせると、新しい研究に発展することがあります。こちらが他にはないよい装置を持っていたら、向こうでつくっ

たサンプルの測定をしてくれないかとか、そういう依頼もありますし、新しい研究ができていきます。得意技によっては、共同研究の請負が本当にあっちからもこっちからもいっぱい来るということがあるわけです【スライド②ー8】。

15. 研究スタイル③大規模プロジェクト

1) タイミング

私も入っている大規模プロジェクトの話に移ります。この分野はたくさんの方が関わって論文もたくさん出ます。

先ほど言ったように私は物理のなかの宇宙物理関係で特にスペース実験といって人工衛星を使う実験に携わっています。立教の物理では、実験分野は宇宙の実験と原子核素粒子の実験分野に限られていて、この二つしかないわけですね。私は宇宙のほうに所属しております。

立教の物理の宇宙分野の実験的な研究では人工衛星を使うことが主です。人工衛星は最近だと1個をつくるのに10年かかります。10年かかるということはマスターの前の学部で4年生から勘定しても博士課程を修了するまでが6年ですから、一巡しないわけですね。最近は小規模衛星という潮流も出てきていて、JAXAが一生懸命、小規模衛星の活用に力を入れています、それでも4～5年



かかります。小規模衛星でよい科学的成果をあげるためには相応の工夫やアイデアが必要になります。一方、普通の大きな衛星の場合はとにかく力づくで一番よい観測装置を搭載することを目指します。だから博士でも設計から観測まで一巡は無理ということなのです。プロジェクトのどの段階で自分が博士課程にいるかというタイミングによって、ずいぶんその人の運というか、何をするかというのが変わってきます【スライド②-9】。

2) 論文執筆のシーケンス

われわれの分野だと日本は幸いここ20年ぐらい、一部分の期間を除いて、人工衛星を継続して持っていて、自前で人工衛星を使って観測できました。観測衛星が飛んでいれば、観測提案のアイデアを出して、観測して、解析をして執筆するというシーケンスで論文をつくることができます。

それと同時に、すでに人工衛星が飛んでいるプロジェクトの次のプロジェクトに関わります。そこでは全然別のことをやるわけです。観測とは別に進行中のプロジェクトに関わっておく。これが次のジョブを得るために非常に重要なことになります。

投稿論文や博士論文は天体を観測してそのデータ解析から新しい結果を導くことで書くことが、まず多いです。もちろんまだ打ち上げられていない人工衛星のプロジェクトで、ものづくりで書くこともあります。それはたいていの場合、非常にたくさんの共著者になりますし、それでたくさんの論文を書くのは非常に難しいです。

非常に運がよいのは、修士課程への入学の頃に打ち上げのための人工衛星の準備がだいたいできていて、あと3年ぐらいで打ち上がるというようなケースですね。修士の間はつくっている人工衛星の設計などに関わることは難しいけれども、最後に完成したものの打ち上げ前試験に関与して、実際に打ち上がったら、自分も観測提案をして論文をつくっていく。これは一番楽しい時期です。最新の望遠鏡、最新のデータを使えるわけですから、一番楽しいところなわけです【スライド②-9】。

3) プロジェクトの成否に翻弄されるというリスク

先ほど言ったように、日本の場合は、比較的連続して人工衛星の打ち上げに成

功していました。1979年に「はくちょう」が上がって、その後に人工衛星がどんどんどんどん大きくなって、来年(2016年)の初頭には「ASTRO-H」というのが打ち上がる予定です【スライド②－10】。

スライドに示しましたように、初めは4年ぐらいのペースだったのですが、「あすか」の後が10数年空いています。実は2000年前後にJAXAがロケット打ち上げに何度も失敗したことがあって、その中に「ASTRO-E」というのが入っていました。実は2001年に「ASTRO-E」衛星を打ち上げたのですね。打ち上げたのですが、残念ながら人工衛星になりませんでした。その「ASTRO-E」に携わっていて、「ASTRO-Eが打ち上がったら、博士論文を書くぞ」と思っていた人が残念ながら書けなくなりました。

そのときにどうしたかということ、外国の衛星を使うために、たくさんの人が外国に行きました。ですからやっぱり海外との交流が重要です。われわれの分野は幸い、日本が調子の良い時代がありました。順番に「はくちょう」「てんま」「ぎんが」「あすか」と調子がいいときは、外国に行くのではなくて、外国から日本にたくさん研究者が来るという状況が発生しておりました。その時期があったから、外国とのつながりは分野的に強かったのですね。だから調子が悪いときは日本から出て行って、知り合いもいるから受け入れてもらって外国の衛星で論文を書くことができました。宇宙物理の場合、プロジェクトは大きいですが、最近では10名程度で投稿論文を書くことが多いです。それを数本書き上げて、1つの筋が通ったテーマでまとめると博士論文になるというわけです【スライド②－11】。

4) 地上加速器実験の場合

同じようなことが地上加速器実験でもあります。立教大学でも加速器を使った実験をやっています。これはわりと宇宙の分野と似たところがあります。地上実験ですので、打ち上げ失敗みたいな壊滅的なことはあまりないのですが、昔、アメリカで大型の加速器をつくっている途中に、議会によって中止にさせられたというケースがありました。必ずしも当人の責任ではない事態が起こる可能性があるというのも、大規模プロジェクトの一つの特徴です【スライド②－12】。

それからいろいろな実験をするには、研究所とか他大学との共同研究は基本です。部分的な装置の担当や議論で貢献していく場合が普通です。投稿論文を書く際には、たくさんの人が共著者となります。

博士論文となりますと、普通はその人が中心になって実験をします。だから装置をつくるというのは別ですが、通常はある装置を使った実験提案をします。もちろんバックには指導教員がいるのでしょけれども、院生が主体となって、実験提案をして、その審査を通してもらって、採用してもらって、実験をします。その後は共同で実験した人みんなで、データ解析をして、まとめて論文にすることになります。チームで実験をし、執筆をするわけです。多くの場合は、ソサエティーとして博士論文をつくる人を優遇するという文化があります。博士論文を出そうとして頑張っている人を第一著者にして出版していくということです。

ただし、いい実験をしようと思うと、性能ギリギリの実験が必要になって、うまくいかないこともあるし、装置の不具合など本人の責任ではないことが起こることがあります。前の実験者が装置を壊したとか、いろいろです。LHC (大型ハドロン衝突型加速器) でもどこかが壊れたという話がありましたが、そうなると実験が失敗したり先延ばしになったりして、予定どおりにいかないということになってしまいます【スライド②-12】。

6. 投稿論文執筆と共同研究がカギ —課題としての組織化・体系化—

今日ここまでの組織化・体系化の話を聞いていると、理学研究科はあまりできていないなという感じがします。もちろん後期課程の院生には年に2回報告書を提出させるという事はやっています。それはやっているのですが、文学部みたいに中間論文といったものはやっていません。そういうものではなくて、とにかく雑誌論文を書きなさいと、そればかりをやっているような気がします。

前期課程で雑誌論文を書く人はとても少ないのですが、たまにいて、そういう人は日本学術振興会の特別研究員DC1に採用される事が多いです。難しい分野ほど、逆に論文を出せば採用される確率が非常に高くなります。しかし、前期課程では講義、輪講みたいなものがあって、そちらが主です。研究をしながら講義を受けたり輪講等を行ったりします。【スライド②-13】。

後期課程になると、単位は特別研究指導だけです。物理学専攻の場合は、研究室が三つしかなくて、理論物理学研究室に教授4人、准教授1名。原子核・放射線物理学研究室には教授5名、准教授1名。宇宙地球系物理学研究室には教授2

名、准教授3名という体制ですので、輪講などはみんなこのメンバーで行います。お互いに鍛え合うことができるわけですね。

後期課程の学生は、実は輪講は義務ではございません【スライド②-14】。それでも、発表は同じようにしてもらって、それを前期課程の院生が聞くということになっています。それから定期的なコロキウムも行います。これも義務ではございません。単位とは関係ないです。研究室での報告会、文献紹介、文献講読、これも通常は単位と関係なく行います。

だから昔のほったらかしに近いのかもしれません。とにかく投稿論文作成、これがキーです。通常は、指導教員や、実験がある場合などは他大学や外国人の多くの人が関わっていますから、とにかくそこで成果をまとめるという、これが大変な作業になります。博士論文を書こうとする学生は、こここのところに一番時間を割かれるでしょうね。指導教員を含めて、いろいろな人からいろいろなことを言われます。それをまとめつつ、投稿してレフリーから返ってきたら、また書き直して共著者に回していく。これが一番大変で、かつ一番鍛えられるところだと思っています。

ですから他大学や研究所と連携して行っている共同研究が重要で、同種分野で一番いいデータがほしかったら、やっぱり共同研究しかありません【スライド②-15】。そこで切磋琢磨することになります。一部の分野では博士を育てるという文化があります。例えば博士論文発表会のようなものがあるので、例を1つ紹介します【スライド②-16】。この3月にあったものですが、高宇連（高エネルギー宇宙物理連絡会）という割と小さなソサエティーですが、プログラムを見ると、普通の講演と一緒に博士論文をたくさん入れてあります。いろいろな大学の人がこんなにて、博士論文としてよくまとまっているから、僕らもこれは勉強になるのです。本人たちにしたら、学位を取るまでもいろいろ言われるだろうし、こういう場でエンカレッジされるというわけです。

7.まとめ

まとめとして、博士論文だけでは駄目で、投稿論文を書きなさいという指導をしているというのが実情です。投稿論文を書けば、博士論文はできるだろうということです。研究室ではコロキウムとか論文紹介とかやりますが、比較的自

由に研究をする事になります。研究室外では他研究機関の人と共同でいろいろなことをやるのが非常に重要で、「ソサエティーで育てる博士」という理念が、割と僕らの分野の、特に大きなプロジェクトの分野で共有されています【スライド②－17】。

あまり参考にならない話だったかもしれませんが、以上で私の報告とさせていただきます(拍手)。

○司会 どうもありがとうございました。文系側から見ると、全く別世界という感じかもしれませんが、ジャーナル論文を作成する過程は非常に重要な訓練になるといった点や、対外的な研究交流や議論をするということの重要性が共通に指摘されていたかと思います。この後報告をしていただいた3人によるパネルディスカッションをごく短時間挟みまして、質疑応答へと進みたいと思います。

【スライド②-1】

大学教育開発・支援センターの主催による、シンポジウム

博士(理学)への道

2015 年 11 月 10 日(火)

理学部 北本俊二

【スライド②-2】

目次

- 博士(理学)とは
 - 特に、物理、天文関係に偏った意見
- 博士課程、特に後期課程では
 - 研究、論文
 - 研究スタイル
 - 理論
 - 小規模実験
 - 大規模プロジェクト
- 組織・体系化？

【スライド②-3】

博士(理学)とは

- 博士論文とは(理学研究科 履修要項 p362)

- 1.申請者の自著論文

- 2.申請者の自著または共著論文の中から、申請者自身が寄与した部分を取り出し、これを主体として、あらためて単一の主題のもとに作成した論文。

なお、この形式の論文を主論文として提出するときは、その素材となった自著または共著論文を、参考論文として提出するものとする。

【スライド②-4】

博士(理学)とは

- 次の就職のためには⇒論文の数も必要

- －博士論文だけ書いていたら、次が厳しい

- ⇒自然と2 の論文となることが多い

- 2.申請者の自著または共著論文の中から、申請者自身が寄与した部分を取り出し、これを主体として、あらためて単一の主題のもとに作成した論文。

- なお、この形式の論文を主論文として提出するときは、その素材となった自著または共著論文を、参考論文として提出するものとする。

【スライド②-5】

博士課程、特に後期課程では

- 実験、研究⇒博士論文のため & 次のJobのため
 - 学会発表
 - 国際学会、発表⇒Proceedings (査読なし(あっても形式的)が多い)
 - 雑誌論文が必要
 - 査読有無
 - 数
 - first author (corresponding author)
 - citation 数
- 雑誌論文を書くことが重要

【スライド②-6】

研究スタイル

- 理論
 - ⇒ 少人数(単著もあり)で、たくさんの論文
 - ⇒ 新しいことがわかればすぐ論文
 - 同じアイデアで遅くなれば論文にならない
- 小規模実験
 - ⇒ こつこつ実験、自分のアイデアでじっくりと
 - ⇒ 得意技があると⇒ 大量の論文ができる
- 大規模プロジェクト
 - ⇒ 大人数で、たくさんの論文

【スライド②-7】

理論

- 少人数の著者、単著論文
 - 数本から~10数本の論文
 - 大規模計算機の利用の場合はそうもいかないこともある
 - 他大学同業者、異種業者との交流が重要
 - 学会、研究会、セミナー⇒議論⇒共同研究へ
 - 東京は得をする。

【スライド②-8】

小規模実験

- 物性物理、化学、生命は一般に個々の研究室で実験
 - 研究室での得意分野がある。
 - 他大学同業者、異種業者との交流が重要
 - 学会、研究会、セミナー
 - 得意技があると、共同研究請負ができる

【スライド②-9】

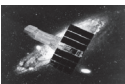
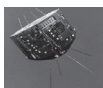
大規模プロジェクト

- 宇宙(スペース実験)分野、原子核素粒子分野
- 宇宙:
 - 人工衛星⇒製作(～10年)、小規模衛星の潮流も出てきた(工夫、アイデアが必要)
 - 博士でも、設計から観測まで一巡は無理！！
 - プロジェクトの開発段階で、どの部分に携わるかは、運次第
 - すでに観測をしている人工衛星で観測
 - 観測提案(アイデア)⇒観測⇒解析⇒論文(物理)
 - 進行中の人工衛星プロジェクトに入り(別途)活動する
 - 運が良ければ
修士課程から、衛星の打ち上げ前試験に関与して、打ち上がったら
観測提案⇒論文 (新しい望遠鏡で、最高のデータを使う)
- ロケットや気球
 - 博士なら設計製作観測解析の一巡が可能？

【スライド②-10】

大規模プロジェクト

- 宇宙
 - 人工衛星⇒必ずしも成功するとは限らない。
 - X線天文衛星
 - 1979 はくちょう
 - 1983 てんま
 - 1987 ぎんが
 - 1993 あすか
 - 2005 すざく
 - 2016 ASTRO-H



2001年2月 ASTRO-E 打ち上げ:衛星にならなかった！
ASTRO-Eで博士論文を目指した人⇒無理

【スライド②-11】

大規模プロジェクト

- ASTRO-Eで博士論文を目指した人⇒無理
- 外国の衛星を使う⇒観測提案、観測、論文へ
- 海外との交流が重要
 - 調子の良い時は: 外国から日本へ
 - 調子の悪い時は: 日本から外国へ
- 宇宙では、プロジェクトは大きい、投稿論文は比較的小規模(～10名?)で書く
 - ⇒まとめて博士論文

【スライド②-12】

大規模プロジェクト

- 地上加速器
 - － いろいろな実験(研究所, 他大)に参加(部分的な装置、議論で貢献)
 - 投稿論文には多くの場合は共著者となる
 - － 博士論文
 - 実験提案⇒審査⇒採用⇒実験遂行⇒まとめ⇒論文
 - チームをまとめて実験提案、計画、遂行、まとめ、執筆
 - 投稿論文には多くの場合は第一著者となる
 - ⇒博士論文
 - － 性能ギリギリの実験⇒うまくいかないこともあり
 - － 装置の不具合(必ずしも当人の責任ではない)⇒実験の失敗や、先延ばし

博士課程指導の組織化・体系化

- 前期課程
 - － 講義、輪講、特別研究1-3, 修士論文指導演習
- 後期課程
 - － 特別研究指導
 - － 物理学専攻だけ研究室体制
 - ・ 理論物理学研究室(教授4名、准教授1名)
 - ・ 原子核・放射線物理学研究室(教授5名、准教授1名)
 - ・ 宇宙地球系物理学研究室(教授2名、准教授3名)

博士課程指導の組織化・体系化

- 後期課程
 - － 輪講(義務ではないが発表はする)
 - － 定期的コロキウム
 - ・ 研究室での報告会
 - － 文献紹介、文献購読
 - － 後は、自由に研究
 - － 投稿論文作成(指導教員＋関係者)が共著(多くは外部研究者、外国の研究者)

【スライド②-15】

博士課程指導の組織化・体系化？

- ・ 他大学、研究所との共同研究
 - － 同種分野での最先端データを取得
 - ・ 博士論文執筆者への優遇措置
 - － 同種分野での切磋琢磨
 - ・ 学会、研究会、相談、
 - － 同種分野で育てる
 - ・ 博士論文発表会

ソサイエティーで育てる博士達

【スライド②-16】

高宇連 第14回研究会のお知らせ
 「今後10年の宇宙観測」
 日程：2015年3月9日(月)-11(水)
 会場：広島大学 学生会館レセプションホール

---- Session 1 ----

座長：田中孝明(京都大学)

13:05-13:10 はじめに (研究会の趣旨や、注意事項など)

13:10-13:40 (一般講演) 高宇連の将来計画について.....栗木久光(愛媛大学)

13:40-14:10 (一般講演) フェルミ衛星による活動銀河核ジェットの最近の結果と今後の連携観測の展望.....田中康之(広島大学)

14:10-14:40 (博士論文) X-ray Study of the Accretion Disk of the Black Hole LMC X-1.....小山志勇(埼玉大学)

14:40-15:10 (一般講演) X線ガンマ線偏光観測の展望.....林田清(大阪大学)

15:10-15:30 --- coffee break ---

---- Session 2 ----

座長：森浩二(宮崎大学)

15:30-16:00 (一般講演) MeVの広視野観測で切り開く高エネルギー天体観測.....中澤知洋(東京大学)

16:00-16:30 (博士論文) Probing the Structure of Ultra-fast Outflows in Active Galactic Nuclei with X-ray Spectroscopy.....萩野浩一(ISAS/JAXA, 東京大学)

16:30-17:00 (博士論文) 超新星残骸のX線観測による超強磁場中性子星の誕生と進化の研究
 ...中野俊男(東京大学)

17:00-17:30 (博士論文) Sub-MeV Gamma-ray Study of Anomalous X-ray Pulsar 1E 1547.0-5408 with Suzaku.....安田哲也(埼玉大学)

3/10(火)

まとめ

- 博士論文だけではダメ
 - 雑誌投稿論文が必要
 - 雑誌投稿論文ができれば博士論文はできるであろう
- 研究室内では
 - コロキウム、論文紹介、、、自由に研究
- 研究室外では
 - 他研究機関の人との共同研究が非常に重要

ソサイエティーで育てる博士達

パネルディスカッション

○司会 それでは準備が整いましたので、進めさせていただきます。話題提供を寺崎先生、その後、事例報告として文学研究科について加藤先生、それから理学研究科について北本先生にお話しいただきました。寺崎先生の問い掛けから話は始まっておりますので、最初は寺崎先生に口火を切っていただいて、事例報告を踏まえてのご質問でもよろしいですし、何かコメントがございましたら、お願いいたします。

○寺崎 私が口火を切らなくても、いろいろな話題が出ておりますのでいいかと思いますが、大学院をテーマとするシンポジウムは多くはありませんので、お二人のご発表に関連して、感想を申し上げたり、質問をしたりしたいと思います。加藤先生のお話で、私が非常に賛同をしますのは、院生たちが外へ出ていくのを歓迎するというお話です。あれは私のような日本教育史の研究や指導をしてきた人間にとりまして、大賛成なんですね。院生たちを指導してくれる場というのは、いくつかあります。一つは学会です。学会がともに指導してくれる場になる。



2番目が現地ですね。私の場合は毎年1回、日本全国の教育史関係史跡を回る旅行をいたしました。これは院生たちが非常に喜びました。考えてみると、東大の院生たちは、勉強しろ、勉強しろと言われてはいるんだけど、どうやら公然と旅行ができないんですね。ところがそういうことだと喜んで出ていきます。やがて向こうから、秋ぐらいになると私に催促するようになりました。「先生、今年はどこへ行くんですか」と。だんだん規模が大きくなって、一番すごかったのが九州の北半分、これを巡っていくという大旅行になってしまいました。九州大学と連合してやったんですが、他大学の院生と一緒にそういう旅行をしていく。とうとうマイクロバスまで借りざるを得なくなったんですが、楽しかったです。そういうことなどをやって、外へ出す。こちらの文学研究科の教育学専攻課程の院生諸氏にもだいぶお世話になりました。

続いて、北本先生のお話は、私が思っていたとおり非常に違うお話で、誠に面白うございました。衛星の失敗と成功が論文を分けるなんて、私は初めて聞きました。なるほど、自然科学の学位取得の背後にはそういうこともあるんだと思いました。

そこで一つ伺いたいんですが、あのプロセスの中で基礎的な訓練はどういうふうになさいますか。理研の事件では若い女性の研究者の方がおられましたね。あ



のとき他大学の理学部の先生方が、「やっぱりあれは駄目ですよ」と一番強く評しておられたのは、実験ノートの書き方でした。あれが報道されたときに、あれでは駄目だと。もう一つは「200回成功している」という発言がありました。「200回」と言ったときに、「あれは駄目ですよ。200回でなく3回やれば十分で、なんでそんな無駄なことを言うんでしょうか。訓練がなっていない」といっておられました。その「訓練」の部分はどのように考えればよいでしょうか。しつけでしょうか。

○北本 たぶん分野によってずいぶん違うと思うんですね。物理でも特に宇宙や地球、素粒子や原子核の分野、素核宇宙というのですが、この分野では実験ノートを渡して実験をさせますが、はっきり言って事細かい訓練は、少なくとも私はやっていません。とにかく再現できるようにノートを取れ、ということは言いますけれども。また、グループで実験をするときは、自分個人のノート以外にその実験のためのノートを作ります。その実験のためのノートには、みんな共通に書いていきます。どこでもそうかというのは決まっていますが、そういうことをします。あるいは最近だったら、ノートではなくてWebDAVといったものがあって、ホームページに複数の人がそれぞれアップができるような環境をつくって、そこでノートを閲覧したり、継続的に実験記録を書いていくというのが結構多いスタイルになっています。その場合は、細かくこうしなさいという指導もしたりしますが、各院生に順番に記録担当者として記録をアップしていくように指示します。それで、何か問題があれば指摘します。それぐらいの指導なんですね。たぶん、あの例の分野のように、もう少し名人芸の必要な分野というのは、ちょっと違うのではないかという気がします。それから特許に関連するような分野は、もっともっと厳しい訓練が通常やられているのではないかと思います。素核宇宙や天文という分野は、比較的そういう点では大らかではありますが、でも、変なことをしていたら当然しかることになりますね。

あとは論文を読み、そして論文を書く。書く際には1人で書くわけではないですから、それが一番大きな訓練になっているのではないかと思います。200回というのは意味不明ですが、ロジカルな考え方にしても論文を読んで身に付ける。論文を自分で書いて、ロジカルでない変な書き方をしていたら論文にならないので、それを修正する過程が一番重要です。実験の進め方の指導は、現状では見よ

う見まねということで特別なカリキュラムとして指導していないので、よろしくないのかもしれませんが。これから改善が必要かもしれないと思いました。

○司会 ありがとうございます。今の寺崎先生のご質問は、大きくは自立した研究者としての能力をどういうふうにチェックするかということに関わってくるかと思いますが、加藤先生、その辺も絡めていかがでしょうか。先生のかつてのご経験だと、大学院生になったところで自立した研究者扱いをされていたと。今はそういうわけにはいかないということをおっしゃっていましたが、博士学位というものがライセンスだとするならば、どういう条件でライセンスが出せるのか、そういう点に関わってくるのかなと思います。自立した研究能力がどういう時点で身に付いたとみなすのかというあたり、お考えがあればお聞かせください。

○加藤 とても難しい問題です。先ほど私の結論のところでも申し上げたように、結局、博士後期課程での教育とか指導によって、その院生をちゃんと研究者として育てられるかという、これは非常に難しい。しかし、特定のテーマに関して、博士論文を書いて、学位を取るところまでなら、一定の指導をすれば達成できるだろうと思います。一方で、個別の業績を積み上げて博士論文に向かっていて、



博士の学位を取るか取らないかとはまた別に、その積み上げていく過程で育ってくれば、自立した研究者というところまでいけるんだと思うんです。

寺崎先生が今話題にされた基礎的な訓練というのが、実は非常に難しくて、文学研究科は文学系の専攻のほかに、教育学専攻、史学専攻、また超域文化学専攻、比較文明学専攻といろいろあって一概に扱えません。私は日本文学専攻に属していますので、文学研究の領域に限っていえば、基礎的訓練といったら、これは作品をまず正確に読み解けるということだと思うんですが、そういう能力を訓練で養うというのは、いったいどういうふうにすればできるのか。仮に目の前に若干不正確な読みをする院生がいたとして、これを訓練によってちゃんと正確に読み解ける人間に育てるということはとても難しいことで、ここに一番の指導の難関と言うんでしょうか、そういうものがあると思うんですね。

ですから、研究者としての十全な能力を養成できるかということを目標にすえて、「指導は可能か否か」と問うと、文学研究畑の教員は、「可能だ」と断定するのを少なくともためらってしまうと思うんですね。そこから「文学なんて教えられるものではない」というふうに反対側に振れると、非常によろしくないことが起きてしまいます。そこで、では何かできることはないのかということについては、多種多様な訓練はありうと思いますし、また先ほどの院生の場合のように、教員の指導を経て査読つきの雑誌に論文が掲載されれば、その論文を学界で認めてくれたわけですから、一人前の研究者に向けて歩みを進めた手応えを感じているのではないかと考えています。

○**司会** ありがとうございます。では、加藤先生、北本先生から何か相互にでもよろしいんですが、文理の違いもありますから何かご質問やコメント、補足がございましたらお願いいたします。

○**加藤** 厳しい話になりますが、院生の備えた才能の面、それから取り組もうとしているテーマの性格などを考えると、ありとあらゆる院生が、指導することによって、研究者としての自立、あるいは優れた博士論文の完成という目標に到達できるのかということ、それは、実は難しいのではないかと私は思っているんですが、いかがでしょう。

○**北本** 難しいですね。実は立教大学に来てから、僕はあまり博士を出していないのです。1人です。後期課程までいった院生はいるのですが、残念ながら途中でやめている。今は2人いて、D2、D1です。これからですが、難しいですね。やっぱり「ジャーナルの論文を書け、書け」と言っても、なかなか書けない場合もあるし、あまり尻をたたいてもメンタルの面で苦しくなってくると逆効果です。そういう場合は非常に難しいなという気がしております。

○**司会** ありがとうございます。北本先生からは何か質問のようなことはございますでしょうか。

○**北本** 加藤先生に質問です。中間報告書のお話がありましたが、あれがやっぱりすごいなと思いました。あれでたぶん書き直しをやらせるわけですよね。それは学生にとっての非常に大きな教育になっていると思うのです。もちろん指導教員も大変でしょうが、そのときに書き直しはやっぱり指導教員、副指導教員と本人と、みんなでやるということが基本なのではないでしょうか。それともほとんど当人が頑張って書き直して、それに対して指導教員がコメントをするぐらいのものなのではないでしょうか。どうなのでしょう。

○**加藤** 私は日本文学専攻でして、よその専攻も博士論文中間報告書で口頭試問をしているのは確実なんです。その後、何を求めているかということについては不確かです。確認しかねます。日本文学専攻の場合は、書き直しまでいくのはまずめったになくて、とにかく出てきたものに対して、「そんなに風呂敷を広げてちゃんと完成するのか、もっと絞らなければいけないのではないかなど、そういう根本的な問題設定のことを脇から言われるわけですね。正と副の指導教授どうしはある程度、意思の疎通を図っていて、その上でもっばら正指導教授が博士論文中間報告書の作成にもかなり関わっているわけです。

そこに第三者の教員も口頭試問に加わるわけで、遠慮会釈ない助言をその場で行なったりしますが、それが当たっていることもないわけではないんですよ。院生も正の指導教授から指導をされて書いたのに脇からいろいろ言われて、ちょっと混乱したりします。それをやはりもう一度、正指導教授と当該の院生とで受け止めて、確かにそうだなと思えるところがあれば、それを軌道修正して、

学位論文に向かっていくという、そういう一つの関門として、中間報告書の提出ならびに口頭試問が機能していると思っております。

○司会 北本先生、よろしいですか。ありがとうございました。寺崎先生、何かございますか。

○寺崎 少し違う点について発言しておきます。今日お配りしている資料で中教審の答申をまとめたものがございますね（【参考資料】p.82-83参照）。この複数の答申の中でずっと共通して言われていることが幾つかあるんですが、そのうちの一つが集団指導のことなんです。一番左側の2005年の答申の一番下に「複数の指導教員による論文指導体制を構築する」というのがございます。また、真ん中の欄、2011年の答申の下側、組織化のところの3番目に「高い専門性ととも、広い視野・独創性・創造性を涵養するために異なる専門分野の複数の教員が論文作成等の研究指導を行う体制を確保する」とあります。それから一番右の2015年の審議まとめでも組織化の欄の一番上に「異なる専門分野の複数の教員がDP・CPについて共通理解をもち、それぞれの役割分担と連携体制を明確にする」とあります。つまり教員同士の関係のあり方についてずっと提言があるんですね。



これについて登壇者の皆さん、フロアの皆さんはどのようにお考えでしょうか。
時間があれば、ぜひいろいろなご意見を伺いたと思います。

○**司会** ありがとうございます。それでは、思い付くところからで構いません
ので、フロアの方からご自由にご質問、ご発言をいただければと思います。

【参考資料】大学院教育の「体系的」「組織化」に関する中央教育審議会の提言

	2005年 答申	2011年 答申
	新時代の大学院教育 —国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—	グローバル化社会の大学院教育 ～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～
体系的	・各大学院の課程の目的を明確にし、それに沿って学位授与へと導く体系的な教育プログラムを編成・実践し、そのプロセスの管理・透明化をはかって大学院教育の実質化（教育の課程の組織的展開の強化）を図る ・大学院教育の組織的展開を強化していくためには、各大学院のそれぞれの人材養成上の目的と学生に修得させるべき能力等の教育目標を明確にし、これらに即した体系的な教育の課程の提供、その責任ある実践のための人的・組織的体制、物的環境を整えることが重要である ・学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修するコースワークを充実し、関連する分野の基礎的素養の涵養等を図っていくことが重要である ・博士課程は、5年間を通した体系的な教育の課程を編成し、コースワーク、論文作成指導、学位論文審査等の各段階が有機的なつながりを持って博士の学位授与へと導いていくといった教育のプロセス管理が重要となる ・人材養成目的等に応じてアドミッション・ポリシーを明確にし、入学者選考を行う	・学位課程ごとに人材養成の目的や学位の授与要件、修得すべき知識・能力の内容を具体的・体系的に示す ・コースワークから研究指導へ有機的につながった体系的な大学院教育を確立する ・学生が幅広い基礎的能力や俯瞰的なものの見方を修得した上で専門分野を選択し、研究指導へと有機的につながるようにすること ・専門分野に共通するコア科目を修得させるなど体系的なコースワークを充実させる ・博士課程教育に重点を置く大学などでは、修士論文に代えてQualifying Examination (QE)を導入し、一貫した博士課程教育を確立する。QEでは、体系的なコースワーク等を通じて、博士論文作成に必要な基礎知識、研究計画能力、倫理観等が修得できたかどうかを審査する
組織化	〔円滑な学位授与の促進方策のなかで、体系的・組織化に関連するもの〕 ・コースワーク修了時に、一定期間内に博士論文を提出できる段階に達しているかを審査する仕組みを整備する ・学位論文に係る研究の進捗状況に関する中間発表を実施する仕組みを整備する ・複数の指導教員による論文指導体制を構築する	・多様な能力をもった様々な分野の教員によって専攻の枠を超えた学位プログラムを構築する ・担当教員は綿密に協議し、教員間で、カリキュラムの共通理解の醸成と役割分担・連携関係の明確化をはかる ・高い専門性ととともに、広い視野・独創性・創造性を涵養するために、異なる専門分野の複数の教員が論文作成等の研究指導を行う体制を確保する ・大学院教育レベルのFDを充実する ・体系的な大学院教育を通じて多様な学生を切磋琢磨させるために、小規模専攻を融合型の専攻へ再編したり、専攻間・大学間で連携・協力したりして教育の質を確保する

立教大学 大学教育開発・支援センター主催シンポジウム

「大学院指導の組織とシーケンス—立教の点検と展望から—」（2015年11月10日）

※本表は各答申等の内容を当センターで整理したものです。なお、直接引用の場合も引用符は省略しています。ご了承ください。

2015年 審議まとめ
未来を牽引する大学院教育改革 ～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～ • 学位授与の方針 (DP)、教育課程編成・実施の方針 (CP)、入学者受入れの方針 (AP) を一体的に策定し公表する • DPにはどのような能力を身に付ければ博士号や修士号を授与するのか具体的に示す • CP策定においては、タコツボ的な教育に陥ることのないよう、体系的なコースワークの実施などに留意する • 身に付けることが期待される能力 (コンピテンス) が国際的に通用性のあるものとなるように配慮する (国際的なチューニングの取組みにも配慮することが望ましい)
• 異なる専門分野の複数の教員がDP・CPについて共通理解をもち、それぞれの役割分担と連携体制を明確にする • 教育・研究指導を実施・評価・改善する組織的教学マネジメント体制を構築する • 大学院教育レベルのFDを充実する • 研究不正防止の策の一つとして、審査段階だけでなく研究指導段階から、所属研究室以外の複数の教員による指導体制を構築する • 大学院教育の質的向上のために、各大学が学位・分野別の学生規模を見直す (入学希望が増加している場合は受入れ学生数を拡大する、小規模専攻は融合型専攻に再編・統合する等)

質問1

○**質問者** 埼玉大学の齊藤です。今日はありがとうございました。今の寺崎先生のお話も絡めてお伺いします。私どものところは異分野なのですが、指導教員以外の教員も入って中間発表ということをやって、そこで質疑応答も行っています。加藤先生のお話にあった中間報告書では、発表会まではしないのでしょうか。また北本先生のところではいかがでしょうか。

○**加藤** 博士論文中間報告書の審査は、ある種の試験の意味もあるので、閉ざされた環境の中で行われているわけですね。こういう場ですから、教員の側も遠慮なく厳しい意見を言えるということがあります。一方で、ほかの院生たちも含めたオープンな場で院生が発表するという方法も重要な意義を持っていると思うんですが、文学研究科ではまだそれが制度化されていないということです。

ただ、意義はありますので、特に日本文学専攻の場合、院生が幸いにして大勢いますので、それぞれのゼミ単位では必ず夏合宿など、しかるべき時期に発表をさせて、みんなの前で必要な場合は厳しく指導して、ぐっと成長を促すといったことが行われています。そういう場では院生同士もかなり厳しい意見を闘わせますし、それがご質問にある「発表会」の機能を果たしていると思います。



私個人の考え方としては、かなり違う領域の研究をしている院生の発表を聞く機会があれば、聞く側に才能があればという条件がつきますが、非常に多くのものを得るのではないかなと思っていますので、あまり近接領域だけで発表会をするのではなくて、もう少し日本文学なら日本文学全体とか、あるいは文学領域全体とか、少し離れた領域の発表も、お互いに聞き合うことが、ためになるだろうとは思っています。

○北本 ドクターに関しては、制度的にはないですね。やっているのは報告書を出してもらうということだけです。事例報告の中でも言いましたが、研究室が3つあって、それぞれ教授、准教授で5人ぐらいいるわけです。その中で輪講等で議論はあるのですが、ドクター論文の中間という意味では意識されていません。ですから、その時々、やっている個々の研究に対して報告をさせて、それにコメントをするということであって、うまくいけば学会発表とかジャーナルに投稿できればよいという意識で行なっています。むしろこのスタイルのほうがよいような気がします。



質問2

○**質問者** 北本先生のお話の中で、プロジェクトで打ち上げが失敗した際のお話がありました。そういう国家プロジェクトが失敗したことについて突き詰めるということも非常に研究的価値があるのではないかと思ったのですが、学振の審査員の求める価値というのはどういったものなのか、お聞きしたいです。

○**北本** 学振を出すときは、僕らの場合は、こういうことを目指して観測をしてその結果を出す、そうするとこういうことが分かるであろうと、そういう研究の筋で申請を出します。それで審査員が「これはできなくなったね。だから駄目だよね」となるのは、別に普通な気がします。たぶん僕が審査員でも、やっぱりできないものは駄目だと思います。プロジェクトの失敗を突き詰めるといのは、別の課題だと思います。

○**司会** ありがとうございます。研究のフィジビリティの前提条件が崩れてしまった以上は、審査としてそれは致し方ないということだと思います。ただ、学振に限らず科研費などもそうですが、結局、審査員の目から見ると、この申請を通して成果が出るというふうに見えるかどうかというところが重要だと思いますね。「やってみないと分からない」と書かれても、それではちょっとお金がつけられないということになってしまいます。「確実にこういう成果が出ます」ということがある程度見えた申請だと、審査員の側も安心してお金がつけられる。ただ、それを繰り返していくと、細かい研究成果を積み上げていくという話と、大きなテーマを狙っていくというところのジレンマといいますか、そうした問題が制度的に方向づけられてしまうという部分もあろうかと感じます。

質問3

○**質問者** 埼玉大学の禹と申します。非常に興味深いお話をありがとうございました。1点だけ、特に加藤先生にお尋ねしたいんですが、さっきお話の中で、例えば論文を順序よく積み上げていくということと、大きなテーマに取り掛かるということについてお話しされました。私たちは、例えば院生に対しては「論文を書いてください」と言っているんですが、これは特段変わったことではないと思います。ただ逆に、教員の採用審査をするときに、たくさんの方々が論文業績の

リストを付けて送ってくれるんですが、実はそれを見ますと、本質的なところをついてくれればいいのに、あまりやってくれず、とにかく本数をそろえるということに走っているような傾向が見られるんですね。ですから、確かに論文の本数を増やすというのは非常にいいこと、あるいは必要なことだとは思いますが、その中で特に文系の場合に、もうちょっと本質的というか、大きなテーマにどうやって体系的に取り組んでいけるかという点が大きな問題だと思います。どうすればそのバランスがとれるのかというのが非常に重要なところで、ちょっと難しい問題かもしれませんが、ご意見を聞かせていただければと思います。

○司会 論文を積み上げていくというステップを踏むことと、大きなテーマを狙うということ、あるいは研究の量と質をどういうふうに確保していくかというあたりのご質問です。加藤先生いかがでしょうか。

○加藤 これは大学院生を育てるということだけではなくて、研究が本当に発展していくということはどういうことなんだろうかということの問い掛けだと思います。まず、博士後期課程に限って言いますと、以前は寺崎先生がおっしゃったように、私もそういう中で育ったわけですが、学位などというものはまず取れな



い。あるいはそれを取ろうなんていう「世俗的な欲望」を持つてはいけないとか、いろいろな考え方があったと思うんですね、特に文系の大学院では。しかし、そういう時代は、差し当たり学位は取れないんだから、自分の好きなことを多方面に研究していける、あるいは一つのテーマにじっくり時間をかけて取り組めるといふ面があったと思います。

かつての人文系大学院、特に文学研究領域では、一つのことばかりにテーマを絞っている人よりも、いろいろなことで多彩な業績を生み出している人のほうが、研究者として才能があるという捉え方があったと思います。私の偏った印象かもしれませんが。一方、学位というのは研究者のスタート、パスポートなのであって、とにかく博士課程を修了するときにはみんなが学位を取るのが当たり前なんだというふうに、制度が変更になって以降、私たちの指導の方針もそうですが、やっぱり大きく変わったと思うんですね。最短距離で一つのまとまったテーマを研究する。そして学位論文を完成させる。そこから先、どうやってその研究者が育つかは、その後の本人の努力に任されていて、学位取得まではとにかく最短距離で行くのがよい、あるいは行くしかないということになったと思うんです。院生がいろいろなことに手を出していると、「君、君、協道にそれないで、真っすぐ行きなさい」というような指導をするように変わって来ているように思います。先ほどご紹介した経済学研究科も、論文業績について、学位論文と関係しているテーマの業績でないとカウントはしないという要件設定をしていますが、そういう考え方も、学位論文の完成を第一義として研究ないしその指導の過程を捉えていることによるものと推測します。

現実に3年間で博士論文を完成させるというのは大変なことですから、まずはそのテーマに関係している論文、それも査読付きの雑誌に掲載されるような論文を蓄積していくこと自体は、悪いことではないと思うんです。ただ、そういうふうに効率よく育った研究者がその後どうなるのかは実は分からない。ですから、「本当はね、いろいろなことをやるほうがいいんだよ。息の長い研究をしたほうがいいんだよ。でも、今は学位を取ることが大事だね」というように、「本当はね」ということと、「学位を取るためにはね」ということの二重構造を、一応理解させるとか、そういうことも必要なのかなと思っています。

後期課程に進学してすぐに行なう研究テーマ設定でも、本人が非常に大きな、有意義なテーマを考えていても、指導する立場として、それはちょっと3年間で

学位論文に到達しないのではないかと思います、「そのテーマはゆっくり後で取り組んではどうか」とか、「学位論文としては、そのテーマはちょっと難しいなあ」とか、本質的ではないような指導をしている自覚症状がございます。博士後期課程というある種の「学校」の体系の中では、どうしてもそういうふうに本質を少し後回しにしても、差し当たり学位を取らせたいという、そのような意識のもとに、ややいびつな研究指導をしてしまっているのではないかと、自問自答することがあります。

○司会 寺崎先生は今の問題をどのようにお考えでしょうか。

○寺崎 三つほど、お話ししたいと思います。一つは指導の問題です。加藤先生がおっしゃったように東大大学院などでは、確かに「指導をしないという指導」がありました。文学部の、加藤先生の出られたところではない別の専攻でしたが、そこでマスターの院生を持っておられた主任教授がとても暇そうなんですよ。「どうしたんですか。先生のところにはずいぶん修士課程の学生がいるのに、楽そうですね」と言いましたら、「いや、うちの学科では、戦前から指導をしない。指導をしないで書くのが修士論文だということになっておりますから、誰も指導を受けに来ません。それでいいのです」という話でした。やっぱりじっくりいたしました。歳が私の6歳ぐらい上の方でしたが、そういうふうにしておられました。

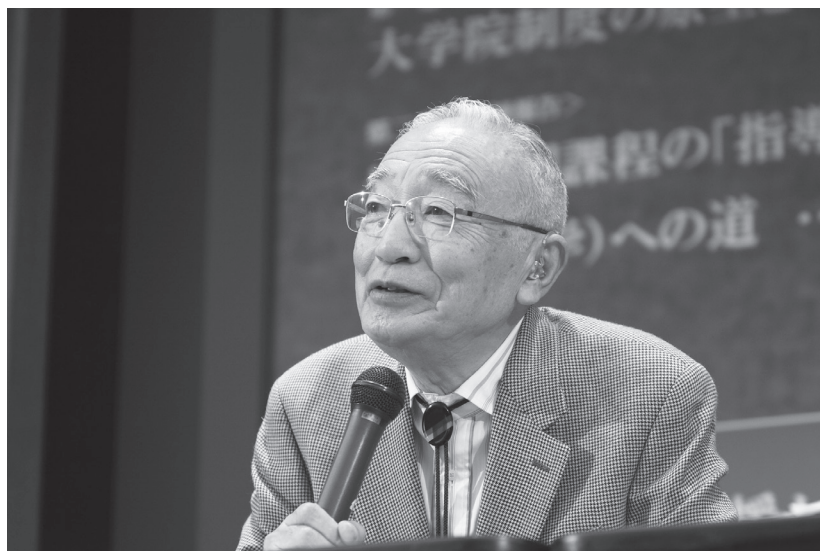
それが、今変わってしまったわけです。数年前にセンターの取組みとして、たくさんドクターを出しておられる他大学の大学院研究科の方にヒアリングをしたことがございます。そのときに東大の人文社会系の研究科に関わっておられた先生からもお話を伺いました。そうしますと、目覚ましい変化、驚くべき変化ですが、1年間に30本から40本もの博士が出ております。これは昔の文学研究科では考えられもしない実績です。おいでいただいた先生に「いつから、どういうつもりでこういうふうに変われたんですか」ということをいろいろ伺いましたところ、最後に出た答えは、「それは院生、卒業生たちの就職を守るためです」。そういう意見でした。

東大大学院の出身というだけで、単位取得退学と書いてだけで効果のある時代は過ぎたんですね。博士を持ってないと駄目ということになった。それに応えるためには、年間40本ぐらいを出す必要があるということでした。一橋大学の社

会学研究科でもそうでしたし、いろいろな大学が踏み切っておられます。ですから、うかうかはしてられない。「指導をしないのが指導です」などと言える時代ではないんですよ。

じゃあ、どうしたらいいかということで、2番目の話題は、さっき申した集団指導のことです。中教審のこの議論の筋を推測するに、たぶん大学院は1対1の指導形態が基本で、その1対1というのは、非常にクローズドな、閉ざされた指導体制だ。これでは駄目だから、教員のほうをむしろ増やして、多くの専攻の教授が院生を育てる。1人の院生がいれば、3人ずつぐらいは指導が要る。それぐらい指導する側がいなくては駄目だと、そういう考え方だと思うんですね。

私は閉ざされた指導体制に代わるものとして、集団指導体制という制度を持ってくるのが本当に良いのだろうか、大いに疑問を持ちます。例えば1人の院生がいたとします。東大のころの思い出で言いますと、教育学研究科というところに私はいました。当時そこには8つぐらいの専攻がありました。それこそ教育哲学から健康教育学というところまでずらっと並んでいる。それで集団指導体制がよいと言って、ある院生の研究テーマに対して、例えば教育史と教育社会学と、場合によっては健康教育の3専攻の先生が指導に当たるのがいいだろうか。これは怖いと思います。学生がおそらく分裂します。よほどのキャパシティがなかつ



たら分裂します。キャパシティがあればいいです。この先生の言うことはこういうことだけれども、こういうふうに受け取るべきだ。この先生の言うことは、この棚で受け取るとか。これぐらいできる学生ならいいけれども、普通はできませんよね。専攻の違う先生たちから、バラバラに違うことを受け取って、それを全部生かして伸びていける学生は、そうたくさんはいないと思う。私だったら、自分の足元が分からなくなって、本当に不統合の気持ちになると思いますね。ですから私は、1人の先生があるテーマに関して、それがどんな文脈や広いテーマと結び付いているかを教えてくれるということのほうが、むしろいいと思います。制度的に対応するのだったら、加藤先生のお話にあったように途中で発表の機会を設けて、院生もいる席で複数の先生が対応する。それならいいと思いますね。ですから私は、先ほど読み上げた中教審答申の共通した提言のラインに関しては、大いに疑問を持っております。

最後にもう1点よろしいでしょうか。社会と学位という観点から見たときに、私は日本では修士も博士もステータスが低すぎると思います。評価はせいぜい研究者としてやって生きていくために必要なもの、という程度でしょう。学位を取ったからといって、給料が上がるわけではなし、「ああ、よかったね」というのがだいたい普通ではないかと思います。

特に私は桜美林大学で、大学職員の方に学位を出す大学アドミニストレーション専攻の修士課程をつくった者の1人です。そこで教えていて、学位を取った方たちが、例えば修士号を取って職場に戻ったからといって優遇されているか。全く優遇されていません。何の関係もない。かえって「職務をサボって、いい勉強をしてきてよかったね」と嫌味を言われかねません。これでは駄目だと思います。博士だって似たようなものではないでしょうか。これは外国、例えばアメリカと全く違う。Ph.D.と書いてあるだけで、社会的待遇の仕方が違う。あれが実現しないと、やっぱり日本で大学院というものが定着しないと思います。

○司会 ありがとうございました。時間が5分ぐらいオーバーしておりますので、ディスカッションと質疑応答はここまでとさせていただきます。

I 閉会挨拶

○司会 最後に大学教育開発・支援センター副センター長の小澤先生からご挨拶をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○小澤 副センター長を務めております小澤でございます。本日はお集まりいただき、誠にありがとうございました。私は博士号を取りはしましたが、博士課程での指導はまだ経験しておりません。これからもしチャンスがあれば、博士課程での指導もしたいと思いますが、今日のお話には受け止め切れない部分もございますので、簡単な感想だけを述べさせていただきます。

一つは寺崎先生が途中でおっしゃっていたことですが、博士課程というのはドクターを出すコースです。コースは歩く道だとおっしゃってありました。ということは、その歩く道を大学院生にちゃんと見せてあげて、こういうふうに進むとゴールまでたどり着きますよということを、手引きをするなり示すなりして、そこまで連れていってあげるというのが大学院指導なんだろうなと思いました。また、これからは、その意識をより強く持たなければいけないのかなという感想を持ちました。

それから理学研究科も文学研究科も、学生自身や学生の成果を大学の外に出すということ、大学の外との関係をつくってあげるということを重視している点で共通していました。ディスクローズというか、外にさらすということが博士課程においても非常に重要なんだということを、今日お話を聞いて強く実感しました。

以上の2点が私の感想です。本日はフロアの皆さま、ご登壇いただきました先生方、そして司会をお引き



大学教育開発・支援センター副センター長、経済学部 准教授

小澤 康裕

受けいただきました松本先生、本当にありがとうございました。(拍手)

○司会 それでは短い時間ではございましたが、これにて本日のシンポジウムを終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

●大学教育開発研究シリーズ バックナンバー

- NO.1** 外から見た立教大学
—ミッションと社会的要請— (2006年)
- NO.2** 「学生による授業評価アンケート」にもとづくRIKKYO授業ハンドブック
—学生の積極的な学習を励ますために— (2006年)
- NO.3** 変化する高校生と大学への期待
—高校から見た立教大学— (2007年)
- NO.4** わが大学・わが学部の教育改革を語る
—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム— (2007年)
- NO.5** 立教大学の初年次教育とその展開
—〈勉強〉から〈課題探求型学習〉への道— (2007年)
- NO.6** 学生が見た立教大学の初年次教育
—今後の充実に向けて— (2008年)
- NO.7** 立教大学の今後と中教審の審議
—学士課程教育の再検討と将来を考える— (2009年)
- NO.8** バージニア工科大学視察報告
—米国における先進的な教育改革の事例に学ぶ— (2009年)
- NO.9** 立教大学における学習支援と図書館 (2009年)
- NO.10** 立教大学におけるアドミッション・ポリシー (2010年)
- NO.11** アクティブな学びをデザインする
—4つの授業をめぐる対話— (2010年)
- NO.12** グローバル化に対応する大学教育の在り方
—東アジアの高等教育における質改善への取組に学ぶ— (2010年)
- NO.13** 大学生の社会的・職業的自立に向けた教養教育の在り方 (2011年)
- NO.14** アクティブな学びをデザインする vol.2
—学生の気づきを促す3つの対話— (2011年)
- NO.15** 学位取得へ導く大学院教育のあり方
—博士後期課程を中心として— (2012年)

NO.16 日本の大学に求められている国際通用力とは（2012年）

NO.17 学びが高まる学習環境とは
—ハード、ソフト、コミュニティ—（2013年）

NO.18 大学院研究指導への誘い^{いざな}
—海外マニュアルの紹介—（2013年）

NO.19 「読む」学生が育つ大学教育を求めて
—若者の読書実態と授業実践を始点として—（2013年）

NO.20 アクティブな学びをデザインする vol.3
—2学部における初年次演習科目の実践から—（2014年）

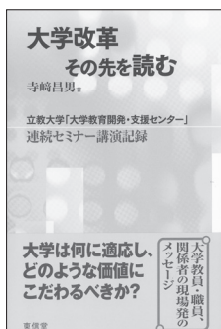
NO.21 アクティブな学びをデザインする vol.4
—学びの転換を促す「導入期」演習科目—（2014年）

NO.22 「学習成果」の設定と評価
—アカデミック・スキルの育成を手がかりに—（2015年）

NO.23 海外大学における博士号取得
—立教大学教員の体験をきく—（2015年）

NO.24 アクティブな学びをデザインする vol.5
授業デザインとアクティブラーニング
—新任教員向けFDワークショップ開催記録—（2015年）

●連続セミナー講演記録



寺崎昌男『大学改革 その先を読む』（2007年）
東信堂 ¥1,300

編 集

谷村 英洋 (大学教育開発・支援センター 学術調査員)

大学教育開発研究シリーズ NO.25

大学院指導の組織とシーケンス

—立教の点検と展望から—

2016年3月発行

発 行

立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615

[http : //www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/](http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/)

e-mail : cdshe@rikkyo.ac.jp

制 作

株式会社アクセスリード

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-15-1 渋谷クロスタワー 24階

TEL : 03-5774-2330 FAX : 03-5774-2339



RIKKYO UNIVERSITY